野津原方言集

29

目次

みだし……1
もくじ……2
はじめに……3

★　方言子どもの世界
白山雨乞い祈願……5
二百十日わ厄日……7
サカシイ時健康を……9
一軒屋ん籾すり苦労11

★　民話、伝承
帰ってきた人情……13
昭和ん精農家……15
古るきを尋ね……17
方言説明　19
こぼればなし……20

★　方言単語
『の』⇨『ツ』……21

★　女性の底力
お米賛歌……33
女ごん産わき……35
祭餅の里帰り……37
方言説明……39
こぼればなし……40

★　ちょつと一服
男の飯わき……41
干支にまつわる……42
ほぅちょぬべぬべ……43
方言説明……45

★　宝の玉手箱
野津原音頭の世相も……47
健康確認自助努力……49
唄以上ん楽しさ……50
子供会ン唄できた……51
何でもござれ……53
方言説明……55
古い格言から……56

★　ふるさとの味
ダンゴ汁……57
黒砂糖いり火焼き……59
キナ粉オハギ……60
方言説明……61
こぼればなし……62

★　あげなこげな話
鈴ヶ滝恋の花……63
七瀬川愛歌……65
田植え草取り機械……66
方言説明……67
こぼればなし……68

★　工藤三助街道物語
工藤三助道中旅……69
三助おどり……70
三助物語……71
穴ふさぐ固い岩……73
浮動の導き……74
人の執念岩も通す……75
湛水に水が来た……76
方言説明……77

旅日記スタートする…７８
★　方言単語
『は』⇨『ス』……７９
★　民話、伝承
一荷和尚どけな人……８９
加護かき苦役人……９１
方言説明……９３
石だたみ音頭……９４
★　五助ん夢ばなし
山峰ん夢とロマン……９５
トラック事故悲哀……９７
口説き歌……９８
★　おわりに
ひとことお礼を……９９
★　伝言板
次号のご案内……１００

素人ばかりが始めた　野津原方言調査会も　２７年が過ぎて通算３９冊の冊子が　並びました。内容は冊子の姿も　お粗末ですが今だから残せた　そして多くの皆様が　ご愛読ご支援してくださっている　そんな感謝の気持ちで　今回も完成させお届けできる事を　幸せに思っています。

来年はオリンピックが　東京で開催になりますが　新しい豊かな人間同志の交流が　できます事をお祈りしています。古い生活用語であった方言も　時代間隔はあっても　言葉文化は時と共に変わる中で　いつまでも心の中に　残したいものです。それは先人たちが言葉があったから　それを有効に生かしながら　幸せな健康な国作りに　努力交流したからです。

豊かになりすぎて失われるものが　ないような住みよい　心の豊かな人生がおくられますよう　お祈り申しています。

多侯公匜銘

白山雨乞いん祈り

日年《ひどし》が続いち　今年しゃ特別に暑いき　ジイサンドマ　田植えにもクタビレタニ　暑さにもダッタンカ　今朝は起けれんごたる。孫が『ジイチャン　ママ食べんな』『うん』　返事はしたまんま　起けれんのじゃろう　母親が『今日は　ゆっくり休んだらいいわ』　『そうじゃのう』　お父さんも　そう言うとそれが　聞こえたんか　『いんにゃ　いいど　起けるるど』

元気がいい声じゃが　やっぱ日ごろたぁ　チット違うよな元気は　なかったごたる。それでん　いっときすると　ヨロヨロと立ち上がると　元気なところ　見せたいんか　シャキット　スルと　洗面所に行きよる。じっと　見ていたバアチャンも　心配んごたるが　今言えと悪いち　思うと言わんじゃつた。

ひげ面ん顔じゃが　みんなに心配かけちゃ　悪いち思うたんか『元気じゃき　心配せんでんいいで』　笑顔じドッカと　座るとお茶を美味しそうに飲んだ。『ご飯食べるる』『食べるるで』荒れた働いた手を　ニヨキット差し出した　ので皆んなもドッと大笑いしたが　それは『元気がいい証拠』を　見せたかったのだろう。

お父さんが　『今日は雨乞いがあるき』『俺がゆくき』と元気の　いいところ見せたかったよう。『世話ねえんな』『しょわねえど　まぁ若いもんにゃ　負けんど』　頼もしいジイチャンの声にヤウチは　ほっしたもんの　本当は大丈夫かなち　チット心配もあっち　みんなが見守りよった。

昔かる雨が長く降らん時にゃ　白山権現に『雨乞い』を　する習わしがあっち　今年も今日する事になっちょる。チットデン雨が降れば稲ん発育が　ゆうなっち米が　ガイトできる。百姓は米ん出来が頼りでんあったから。

青年したちが積み上げた　やぐらに杉やひのきん　枝や葉をつみあげた　祭りの棚に神主の祝詞《のりと》が　あがると　みんなが頭さげ　『無事に雨を降らせてください』と　祈りを捧げた。神様に頼るほかはない　そこまで続いた天気が　そん願いを聞き届けてくれるか　まさに命がけの『雨乞い』でんあった。

人間が努力して土地を水を　頼りに精魂こめて作る　米つくり……それには太陽も空気も　水も絶対必要じゃが　それは人が作りだせん　どうにもならん　仕組みでんあった。じゃきこす　精一杯した上じ　それを待つ苦労が　百姓には繰り返し続けられてもいる　これが農家でんあった。

そん欲しい水が　今少しでん必要な時。もう限界にも来ているような今でんあった。燃え上がる青葉が　煙りとなって空中に立ちのぼる　まさに神にこの願いとどけと　一体となって念じる『雨乞い』の　祈りでもあった。火炎もメラメラと煙りの中に　渦巻いて周辺は黒煙りに包まれた。

とその時じゃつた　鶴山ん方角にピカリ稲妻　まさに天祐神助《テンユウシンジョ》　ヒャクショウの命かけた　願い祈りが神に届いたのだろう。2、3度の稲光のあと　突然の雷鳴が耳に張りさけるように届いた　と思うと小粒の雨が祈りの　人たちん頭にパラパラ……そして大粒に変わって降り始めた。

集まった人たちん煙の煤に　汚れた顔が笑顔に変わる。喜びん声が大声に変わって　万歳になった。燃え盛る火炎　青葉の煙りがいくつも交差すると　皆のんなの笑顔も見えんぐれぇ。降る雨にぬれてん　もぅ構わない今ん喜び　苦労が実るぬ思うと　『濡れてん干しゃ乾くもん』　白山の社に喜びん声が　どよめいちいつまでん　嬉しい顔がそこに残った。

『二百十日は厄日ち言う』

昔から『二百十日』は　シケが来たりするき　秋ん厄日ち　言いよった。稲が折角ゆう出来たのに　シケ《台風などの風雨》が　来ると稲はカヤル《倒れる》　実った柿やら栗もオツル《落ちる》もんじゃき　悩みん種じつた。なし風が吹かにゃ　悪いんじゃろうかなぁ。人間の勝手さは　すぐここで愚痴が出る。

大正１２年《１９２３》関東大震災があっち　東京なんかが大けな　被害におうた。それじのうでん　秋口にゃ決まっち　台風が来るもんじゃき　百姓ん人たちぁ　もうふんと　『夏ん水がほしい頃にゃ　なかなか雨が降らんじ　もう雨はいらん　ち思う頃になっち雨やら風やら　いっしょに吹く降る。

そん頃ん米の値段は　１俵あたり《６０ＫＧ》１０円４０銭じゃたき　今がだいたい１俵当たり　１万５０００円ぐらい。物価の動きも解るじゃろう。

台風じ寝ちしもぅた稲を　ジワット起こしち　稲刈りまじチットデン　実いりがゆうなるごつ　毎日が忙しい農家ん仕事になった。それでんチット　朝晩が涼しゅなったき　仕事もハカドル。朝草を切りにゆくと足もとが　露じ濡れち困るが　それだけ夏から　秋に変わった　証拠でんある。

十五夜ん月はやっぱ美しい　むしむしするごたる夜は　『たまにゃ雨が降りゃいいに』　こん前こす　『雨が降らにゃいいに』と文句いいよったのに　降らねば降らんで　クジュ言う。人間の勝手さにも　困ったもんじゃなぁ。１５夜ん月はまん丸い。２０日が☞『立ち待ち月』　２１日が『居待ち月』　２２日が『寝待ち月』ち言うそうな。あん美しい月にも　見る日によって　いろいろ意味があっち　呼び方も違うごたる。

窓越しに月を眺めよると　ツユクサ、ドクダミ、ヘチマ、オシロイ花が　ちっとんずつ枯れはじめた。秋野菜ん種まきゃ　彼岸のお中日ごろがいい。早く撒いたんじゃ　虫に食い荒らされる。なんでも時期があるんも　昔からん体験が生かされる　そこに人間の知恵と経験が　うまく噛み合うんじゃろう。

『シケん害はあんまりナカッタナ』　隣んジイサンガ　田まわりかる帰り道　寄ってきた。『いいあんばいジヤッタ　お前かたどけじゃつたな』『風が避けちくれたんか　痩せちょるきか　皆たっちょつたわな』『そりゃよかった　出来がよかったき　どげかち思うたが　何よりじゃな』

『まぁ　お茶でんどうど』　奥から手盆じ　朝茶が出たもんじゃき　笑顔じ腰かけた。『ちっと溝刈りも　セニャナルメェ』『ジャナァ　水が引かんと困るきなえ』　『焼き米も　好きじゃき　セツクもんジャキ』　大声じ笑うのん　実りがまぁまあ　よかったきじゃろう。

相手を心配したり　手の内ぅ探るごたる話じ　仕事がドケナ事になりよるか　同じ百姓でんいろいろ　あるごたる。二百十日がなんとか大けな被害も　のうじ過ぎた今は　取り入れまじ無事に荒れたり　猪にやられにゃち　気が休まれん日が　続きよった。『綿入れブク』を　干しちいつでん　使われるごつ　シコしち女ん人たちの仕事も　目にゃみえんような　事の多い百姓農家は天気が　やっぱ一番いいごたる。

『お宮ん当番じゃき　今年ゃお願いします』　若い団長が箱をさげち　挨拶にやっち来た。『もうそげな時期なったのぅ　頼むで何も解らんき』『あげんことんじょう言う　おいさんじゃき世話ねえち安心しちょるんで』『こりゃまぁ　大事じゃのう』朝の縁先は大にぎわいの　楽しい一時でした。

『サカシイ時に病気んこつぅ』

カベナシじ《軒下》カマゲん《藁で作った物いれ農具》　繕いをしよった　ジイサンが何か　オラビヨル《叫んでいる》。何事かち思うち側に行くと　『こりゆぅ見よ　蟻が餌を運びよる』そう言われち　ゆう見ると　ほんと皆んなが　熱心に何か運んで巣にまで　連なっちょる。

『ほんとじゃ』　孫ん一郎もそこに　シャガミコムト　じっと見つめた。大きな蟻は大きな餌を　コンメー蟻もそれなりの　コンメー餌を　セッセ　セッセと運んでいた。『頑張りよるじゃろう』『うん』　感心して一郎も　じっと見ておったが　『蟻でんこん暑いにまぁ　一生懸命働いちょるのや』

ジイサンモ　そん働く蟻ん姿を　一郎に見せち『人間も頑張る事じ　幸せにもなるる』　ことを　見せたかったんじゃろう。見ちよった一郎も　『ジイチャンも　若い頃かる　ゆう働いたきなぁ』　『や　お前ぁゆう知っちょるのを』『こん前　隣のじいさんが言いよったで　村一番の働き者じゃち』

『隣んジイサンが　そげんこつー言うたんか』『そうで』　それにゃジイサンも　嬉しかった。人から褒められるな　特にヨソン人に褒められるな　人間最高に嬉しいもん。よその人たちは悪くは言うても　褒める事は珍しい。それが隣んジイサンが　そりゅ言いよったな　どんくれ嬉しい事か。

他所の人に褒められるぐらい　目立つような働き者じゃき　家ん中でも皆んなをムドガル。ジャキ皆もんなも　大事にするきか元気じ笑顔もよかった。そんジイチャンが　こん頃セキが　ゆう出ちゴホンゴホン　言うもんじゃき心配になった。お医者に診察しちもろうたら　入院せにゃち言われた。

『あげー元気なジイサンが』　皆んなも心配しちくれよった。が　世の中そげー思う反面　『悪いち言うな　どんでんもう』へんな噂が出たりもする。中にゃ日頃から　気にいらん人どま《などは》　『もうユウナリキルメー』と　言うしもあったと勝手気ままな　世の中じゃき人の痛みを　喜ぶ人さえある。

所が日ごろから用心しよったき　すぐ元気になっち帰って来たもんじゃき　皆んなはタマガッチシモゥタ。『エーもうよくなったんな　よかったなぁ』と　喜び人があると思うと　『え元気になったえ　嘘じゃねぇな』と　不思議な考えの人もある。世の中とは　そうしたもので　人の不幸を喜ぶ心貧しい人もある。

一郎も元気なった　ジイサンが病院から帰りよせん　『じいさん』と泣きついた。『なんか　泣いたりしち　もう元気になったき　ショワネェド』　ジイサンも一郎が　言いたい気持ちがゆう解っておった。『世の中いろいろじゃきの』　『ジイサン』　目と目があうと　大きな手じ頭なぜた。

冬になった壁なしじ　今日もツクロイ仕事しよる　ジイサンに『寒いきもうやめよ』『じゃのぅ　でんこれだけはシチョカニャの　心配せんでんショワネエキ』　『蟻タチも　ドケしちょろーか』『しょわねうき　夏に頑張っち　働いた餌があるもんじ』『そぅか　あの暑い時に　運んだ餌が』　一郎もうれしかった。

朝から粉雪が降りだした。ジイサンとコタツデ　外を眺めながら『暑い時に頑張った　ご褒美じヨコワルルな』『そうど　アリも皆んなゆっくり　お休みじゃろうのぅ』『学校はないんな』『あるとん　大学まじあるき　シャント勉強せんと　蟻達に負くるど』　『よし僕も勉強しよぅと』　粉雪でも休めるし　勉強もできる　幸せなジイサンと　一郎の笑顔を　そっと隙間から覗いて見ている蟻の親子。

『一軒家の籾すり苦労』

友ちゃんの家は一軒離れた　高い場所にあったモンジヤき　冬ん籾すりん頃にゃ苦労しよった。そん頃は籾すりにゃ　機械が多うイリヨッタキ　そりゅう担いで上がるこちなる。『毎年済まんなえ』　口じ言うな簡単じゃが　皆んなは『ふんとのや』と　影じゃ倍もかかる　骨折りが難儀でんあった。

そん代わりに　友ちゃんかたじゃ　飯ん準備かる　好きなしの一杯もシコ《準備》しち　籾すりん無事に終わるぬ　願うちょつた。それだけじゃねぇ　やっぱいつも　籾すりに　世話になったそん心ん負担な　重荷にもなっちょつた。今年も『水番』にも多く出たりしち　そん分は頑張りよった。

百姓が一番豊かになった　敗戦後ん引き揚げ者、復員兵の多い頃じゃつた。作った米は供出んほかに　残った米がユウ売れたお金だけじゃのうじ　物も替えたい人もあっち　物ののうなった後ん物不足ん時代。まっ白い毛糸編み衣類　上等な帯なんか口水ん　出るようなんも多かった。

『こりゅう　お嬢さんに着せたら』『ふんと似合いそう』と話がまとまると米と交換。百姓も現金よりゃ　米が役立つなら話も早いもんじゃつた。苦労しち作った米が娘ん　晴れ着になると思うと　欲しかったババさんの　着物も後回しになったもん。涙ふき『ばあさんな　こん次するきコライイノ』『イイデ』

笑顔じ孫娘ん喜ぶ顔に耐えた　ババサンの白髪が多くなったんも　昼も夜も働いたお影でんある。『バアチャン　おおきに』『あらまぁお嬢さん　優しいのね』　米買いにきた町の人も　心は暖かくなりました。『こん次はバアチャンの　羽織持って来ましょうね』　米買いのこの人も嬉しかったよう。

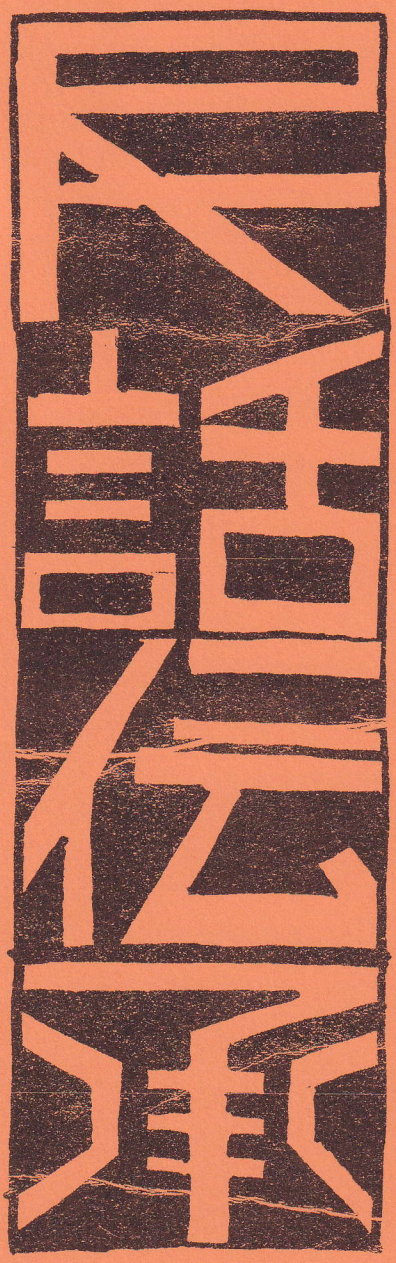
そん頃は米の値段がぐんぐん高ぅなった。敗戦の昭和２０年が１俵６０キロ当たり☞６０円だった《１９４５》　それが翌年は２２０円《吉田内閣、片山内閣》　２２年☞７００円。２３年の吉田内閣《１９４８》時代になると　１４８７円になった。２７年に《１９５４》は３０００円になっちょる。

こん頃になっちどうやら　世間もおちついち　大分ＮＨＫから教育放送もはじまり　各地域に自治公民館もできた。野津原村の役場広報『野津原村報』も発刊　野津原にゃＮＨＫ大分の　農事放送通信員も委嘱されちょつた。農事改良普及事務所もあっち農家の斬新な営農方法も　多く取り入れられよった。

機械運びに苦労した　友ちゃんの家も『籾すり機械』も　一つじコナスごつなったき　運び上げも２人オリャユウジ　気がねものうなった。そん代わり物換えも　スクノオナッタガ　あん時に来た町の奥さんな　時おり尋ねちゃ　いい品物を差し上げちゃそん代わり欲しい　アズキ、ギンナン、タラの芽、なんかを貰う物物交換が　もう平然とサルルごつなった。

よそ者苛めまじゃノウデン　疎開した人たちん苦労は　並みタイテイジャなかったごたる。がこれも生きる為ん　仕方ねぇ事でんあったが　そん頃にコナサレタ　そげな心ん傷はイツマデンノコルものでんある。人をデージしちゃるこた　自分がデージさるる事んハジマリ。じゃき忘れられん季節ん便りも。

白い毛糸ん服と替えた米　ドッチモ真剣欲しかった物　じゃき交換した仲間です。それがお互いの幸せになった。心が通じ合い豊かじゃつたきこす　今も『元気かえ』と　お互いが今を喜ぶ笑顔は物や金じゃ　替えられん宝物でんあろう。故郷に引き上げた友ちゃやんが　６０年過ぎても忘れんな　人間の情愛は大切な心ん輝きじゃき　脳裏にも浮かぶちゆうき　不思議なもんじゃ。


四海為家

素人芝居人情話　『帰っち来た人ん情け』

仕事に雇うち　住み込みじ働きよたが　ヒョンなこつかる若いもんと　口論になっち　出ち行っちしもぅた。五助もで一ぶん世話したがそん　気持ちも通じんまま　つい見かけた机ん上ん貯金箱かる小銭まじ持っち　『悪げはなかろうき』　人んいい五助は　半分あきらめ　半分なムゲーネーチ　もう忘れかけちょつた。

小雪が舞う寒い日　娘が使いかる帰ったら　壁なしぃ誰か立っちょる。怪訝に思うち　裏口かる知らすると　五助が表戸をあけちみた。『だれなソゲン所い　立っちょらんじ　中にハインナ』肩ん雪ぅ払い落とすと　『申しわけノウジ　来られた顔じやネエガ』ち　畏まり恥じ入った　物いいに五助もタマガッタ。

思いだせんし　顔も知らんき何もんかち　思案しちょつた。あれかる２０年も　もう昔んこちじゃ　見違えるごつん若いし。実はこれこれと　話が解けで一た。チョコットしたことじ　喧嘩になったが　世話になった五助さんに　打ち明くると心配するき　黙っち出ちイッチシモウタ。

ジャガ銭も無かったもんじ　ヒョイト目の前ん銭ぅ　握るとそれがズーツと負い目にもなった。心にこげな事が　染みちいたななかなか　拭いさるにゃ難しい世の中。『借金を返さにゃ恥じさらしんマンマジャ　生きられんち　腹ぅ決めた土壇場じゃつた。なんとか頑張っち　お詫びにイヌル　ソゲナ夢が今日まじも　遅らかしてしもぅた』

お詫びしたちそん　罪が消えるもんじゃねぇ　そりゃ解っちょるが現実は　かき消すわけにゃならん　現実でんあるき　苛酷な罪は常にノツカカッチョタ。

ひれ伏しち涙流しながら　悔い改め反省する若者。五助もひとトキァ腹もたった　じゃが時がそれも消し　反対に『あれかるどけーなったんじゃろうか』　早まっち命縮め　そげな悪魔誘いんごたる　読み方まじするんが　五助ん気持ちまじ　悩ましちょつた。

五助ん腹たちも　むしろ同情に変わると　気になり苦になる優しい性格が無性に　哀れにも誘うこちなる。そん繰り返しも月ん　満ち欠けんごと　消えたり満ち足りする　ナカメーうっかり忘れかけもしよった。いや忘れてートン思いもシヨッタ。ソゲナうつろいに　突然現れたそん　若者ん心情。

五助ん心情にも　入りこむごたる　姿を見るにつけ　若者の気持ちもなんか　仄かに理解も出来る　そげな葛藤が薄らいで行く。『まぁ上がっち　茶でん飲みなぁ』　勧められるままに　甘えられぬ自分の身　お詫びに指し出ぇた　そん包みにゃ予想越す中身が感じらるる。

借りたお金と利子　それにお詫びの印が　入っていますので『どうか納めてください』　頭を畳にすりける　あまりにも悲しい所作に　さすがん五助も　もう根負けしちしもぅた。『ゆう解ったき　貸した金と利子は貰いましょう』　『いえそのままどうど　納めてください』『いや　ソリャコマル　高利貸しなる』『とんでもありません　勝手に借りた　いやご免なさい…取ったと　言いかけたので　慌てて口に手を　押しつけた。

『そりゃならん　それは言わぬが花』『でもそれじゃ』『いやそれじゃ　貸した金と利子はいただく』『……』『あとは全部引き取ってもらう』『それじゃ　あまりにも……』『いやそれじいいんじゃよ　貸した分だけな　解った』　五助の仲裁はこれで　閉幕……。』

野津原村ん精農業者２５人　昭和５年米検査から

今かる９０年ほず前　野津原村当時ん　米検査ん時に５０俵以上出した　頑張り屋さんたちん　記録かる表にしたもんです。米値段が１俵あたり《６０キロ》じ　６円２８銭しよった頃です。

猪原作平……１６０俵…福宗。
喜久田甚九郎…１５１々…々
三浦源太郎……１５０々…々
橋山高次郎……１４５々…々
佐藤拡……１４２々…々
後藤幸太郎……１４１々…竹内
大塚福松……１３５々…入蔵
利光三郎……々　々…福宗
工藤三平……々　々…湛水
奈須熊喜……々　々…原村
佐藤由信……１３２々…福宗
佐藤春吉……々　々…原村
裸野花夫……１３０々…福宗
工藤松信……１２９俵…上詰
阿南牛五郎……１２６々…福宗
姫野清馬……々　々…原村
岡松倉太……１２５々…福宗
久多良木武雄…１２４々…々
河野市太郎……１２１々…辻原
河内清二郎……１２０々…竹内
猪原清蔵……１１９々…福宗
久多良木秀留…々　々…々
但馬弥三郎……１１７々…々
上田守……１１５々…々
久多良木孫作…々　々…々

上記以外に　地区別じゃ　次のようじゃつたようです。

入蔵…１４，吉熊…６，日方…１，恵良…１２，本町…３，新町…１２，福宗…５０，辻原…２４，岡倉…３，竹内…３３，矢原…３０，原村…３５，下詰…１０，上詰…２２，湛水…１３，栗灰…３，今畑…５，大田…２０。※　今市地区は合併前のため記録に掲載は　ございません。

当時は浜口内閣当時　米値段は１俵あたり　６円２８銭でしたが翌年昭和６年にゃ　６円５０銭になりました。７年は８円２０銭と値段も上がっちょります。

『ナバを盗むと厳しい掟』

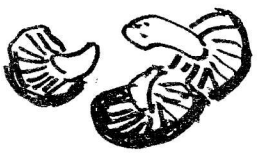
田舎じ米づくりは　大変な苦労が伴いよった。ひらて一楽に作るシタチデン　米ん値はいっしょじゃきち　愚痴ゆうてんなぁこれもシヨウねえき　山を利用した『ナバツクリ』ゥ　しよると　暇が多いんか加勢じゃねぇ　取っちイサギュ　いぬる泥棒があっち　折角『ぼちぼちモグカノウ』ち　思いよるともう　イツンナカメーカ『お先に』ち　いい所どまもう　カタナギもいじょる。

おまけに取るのん　アラマシ乱暴じゃき　もうモテタモンジャネェ。コナイダドモァ　あげくんサンパチ　邪目なるな　せりくりかやしち　荒らされるやら　イノシシよりゃ悪い　ひどさに　もうやむるかち　頭ぅ突き合わせち　相談したんじゃが　いい知恵はどうも浮かばん。

村役に聞いちみたら　『そげん時にゃ　すぐ言いなあ　ナバ泥棒は取ったんが解りゃ　罰金がふとーな取られち　取られたナバも戻るんと』　何年も手がかかるき　罰金も高いんと。

こんだ取ったら　竹田に売りに行くと　嫁ごにも子どもにも　何か買うちゃらにゃち　思うちょつたんじゃが。涙がポロポロ出ち世の中こげな片手落ちじ　いいんかえち　言いとうなるなぁ。喜ぶ顔も消えちもう　死ぬよりゃねぇごたる……とそん時じゃつた　夢かる覚めたんじゃつた。

真っ白ン髭んじいさんが　『オ前が死んだら　後ん者はどけするんか　死ぬ気がありゃ　まぁ頑張れるる　そすりゃイイコトも　あるき』パット消えた　そん挙句に見た夢は　やっぱ張りこめち肩を叩いち　くれたんかん知れん。『やるかのぅ』『やろうえ　ここじやめたら　悪ぼうん思う坪じゃき』　泥棒捕まったニユースが　そん晩のニユースじありよった。



古きを尋ねる唄日記

昔しゃ肥後領じゃつた　そげな名残りん場所は　少ねえんじゃが詩を書き　唄を綴る人たちにゃ　暫く佇んじち耳を　澄まし心を落ち着けると　仄かに伝わるごたる　幻想が浮かんじ来るき不思議な状況が　ありし日を想像もさせちくるる。首藤チエはそげな場所　第二の故郷と自認しち　野津原に定着しち　想像力を醸しだしちくれよった。

肥後領地と言うと　加藤清正が回想さるるが　武将じあっち心は　領民を大事にした故ん　発展振興した郷土野津原が　まるで夢んごつ短期間に出来ち　自分は不幸せにも　短い生涯を終えたが　戦国武将としての　誇りと心根の優しさは　４００年も過ぎた今もそん当時ん　領地民の胸には色濃く　残っているんが証でんあろう。

じゃき少ない遺跡や伝承かるでん　詩が出来て唄が綴られる魔力も温存されちょる。首藤チエは唄に取り組むに　強力な作曲ん伊藤と言う人に　巡り会いそん作詞に　ほとんどが曲をつけた　名コンビでんあったし　即座に取り組む律儀さは　周辺にも多ぅあっち晩年の博学が　素晴らしい思い出も残したごたる。

幻想…肥後ん殿様が　おそらく参勤交代じ　野津原お陣屋宿泊になっちお越しの　模様が地元民との絆にも　見られるから親しみも湧いちくる。『殿様お泊まりで』　そげな声がしよったじゃろう　昔日ん野津原宿場町。今も当時開いた幅約８ートル往還。そこにお茶屋に使われた　門が残っち『ヤクイモン』　そくう通って駕籠が進み　皆ひれ伏して見たじゃろう。と綴った唄は目をツブシャお駕籠行列が浮かんじも来る。

お駕籠をおりられた　殿様はいよいよ開門の　石段を疲れも感じさせず　部署についた『お茶屋』の係に　軽く会釈しち石段をシヤント　踏みしめち　『皆んな幸せに暮らしちょるじゃろうか』　それが心配なように　察せられる。ひれ伏した領民も　お元気にお着きに　ほっと安堵しなが『今夜のご馳走は　なんじゃろうか』ち　口水垂らしたんじゃろう。

東西北に七瀬川が取り巻き　南はかって鷺が城んあった高台じゃき警護も　完璧じゃつたろう。部屋にはいるとてすり持たれち　川ん音や吹く風ん爽やかさに　ほっと疲れ滲み出たんじゃなかろうか。そげな当時ん空想が　素直に詩になり曲がついて　歌われたじゃろうが　天国かるでんきっと　こん奏でる故郷ん音に　疲れも消えたんじゃあるまいか。

３つの区切りの最後にゃ　天国からん予想を描いた　今頃殿様からはじまる　唄にはまず『戻りなさいませ』から　町の衆も花や踊りで迎えたら　と現世にゃ清正公祭りで　心んオモテナシする部分が　ダブッテイルあたり　心にくい詩の配列が　領主に最高んお祝言葉でんあろう。

殿様はドンスん着物ょ　召したかは伺い知れぬか　『世は変わったのう』と　言うじゃろうと　終えてある。今宵はせめても４日間の疲れ癒す　故郷の宿場料理に　野津原らしい珍品もあり山坂道中も　明日は平坦道路をゆっくり　駕籠番の人たちもチッタ楽な体制じ　鶴崎に早く入るんじゃろう。夕餉に五助も志向しち　疲れ飛ばしに　馬子唄ひと節を奏上した。

§　肥後か府内か一の瀬渡りゃ　お国訛がなつかしい　ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ　§

△△△　民話、伝承ん方言説明　△△△

１３Ｐ　ヒヨン…変な。しもぅた…しまった。でーぶん…だいぶ。ムゲネー…かわいそう。壁なし…軒先の下にある空間。だれなソゲントコリー…誰ですそんな所に。ノウジ…なくて。ネーガ…ないが。タマガッタ…びっくりした。こちじゃ…こと。チョコット…ちょつとしたことで。イツチシモウタ…行ってしまう。ジャガ…ですが。ヒヨィト…もしかして。ズート…あれ以来。マンマジャ…ままでは。イヌル…帰る。ソゲナ…そんな。ノッカカッチョツチ…のしかかっている。

１４Ｐ　ひとトキャ…いっときは。どけなったか…どうなったかと。ナカメ…その間に。シヨッタ…していた。ソゲナ…そんな。ソリャコマル…それはこまります。

１５Ｐ　ほず…ほど。１俵あたり４斗…約６０キロ。昭和３０年の今市村との合併前の記録から。

１６Ｐ　ナバ…キノコ類。シタチデン…ひとたちでも。イサギュ…あっさりと。モグカノ…収穫しましょう。アラマシ…乱暴に。やむるかち…やめようかと。そげん…そんな。ふとーな…大変なこと。こんだ…この次は。こんげ…こちらに。いいんかえ…よいのですか。じゃつた…でした。どげするんか…どうするの。やるかのぅ…つづけますか。

１７Ｐ　あっち…あつて。じゃき…ですから。じゃろう…でしょう。ヤクイモン…矢食い門、役員門、薬医門、などの使い分けもあったよう。ツブシャ…とじれば。

１８Ｐ　シャント…しっかりと。口水垂らし…おいしそうで食欲が出て思わず口水がたれそう。鷲ヶ城…１０００年⇨１６００年時代の居城だったが最後は焼かれて。戻りされませ…お帰りさいませ。『世は変わったのう』…非常に繁栄したので。じゃろう…でしょう。チッタ…少しは。一ノ瀬渡り…参勤交代制度化で７つの瀬渡りの　一番渡しの瀬。

★　七瀬川…参勤交代制度化によっち　野津原かる光吉まじ　7つん瀬を渡る街道ん一部じ　元は赤坂川ち言いよったが7つん　瀬を渡ることかる　『七瀬川』ち呼ぶこちなった。そん熊本かりゃ1番の　瀬渡り場所じゃき一ノ瀬渡しち言う。

瀬渡りちゅうてん　川にや橋もあるけんど　浅瀬じゃき季節がゆうなりゃ　下級武士は瀬を渡る。こりゅう　徒渡り《カチワタリち言う》　こげなふうに瀬渡りしち　江戸に入る者が多いき『お徒町…オカチマチ』ん　地名が東京にゃあるんも　そん名残りでんある。そげな人たちも　ここじ泊まったごたる。

ヤクイモン…当時使われちょつた　そん門が現在の野津原神社ん神門に使われちょる　欅ん4本柱ん門がそれじいたみは　ひどいが当時ん　面影が伺い知る事も出来る。風雨にさらされた　痛ましい門じゃがお陣屋の1つの門として　様様な歴史の断面をきっと見て来たんじゃろうが　残念ながら答えては　くれない。がそれが又いいんかん　知れんち思うと夢も　ロマンもある。

お殿様に志向しち五助が　もしかしち唄を聞いち　もろうたとすりゃ　自分がん得意な『馬子唄』じゃろうき　そん少しも紹介しましょう。石原美希…詩。加藤正人…曲。

アオょ　いさめよ宿場はそこじゃ　あれが街道の石だたみ
　　ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ
宇曾に　出ようか荒木に行こうか　四辻峠の思案顔
　　ハ　七瀬のせせらぎ　小鮎がスイイ　ホホイホイ
秋葉　越えれば火伏せの森に　フロー煮えたか諏訪の灯が
　　ハ　七瀬のせせらぎ　紅葉がチラホラ　ホイホイホイ
神楽　囃子に更け行く夜は　濡れてみたいよ　鈴ヶ滝
　　ハ　七瀬のせせらぎ　真ん丸月が　ホイホイホイ

方方唱唱語

◇□△　野津原方言単語　２９１８６語に続いて　△□◇

野津原地区にゃ　昔かる生活用語としち　長年慣れ親しんだ方言が　もう今じゃ古い　『生活文化材』んごつ　今も時折り　高齢者が使いよると　ヅージ行って『それかる　ドケシタン』ち　続きが聞きとうなる。それだけ人の　心の中に溶けこみ　生活する上ん絆としちん役割も　果たしちくれよったごたる。

平成１５年に　『方言単語集　前編、後編、追加編』じ　発行したあと　さらに分割した　今の『方言単語集』に　変えて平成１６年の『続編６号』かる　前回『続編２８号』まじ　方言単語合計は２９１８６語に　なっちょるごたるんです。それだけこまやかにほどきましたが　いかに生活用語としち　使われよったが　解ります。それだけ生活の中じ　絆が幅広うも　なったんじゃろうなぁ。

今回も『の』の項ん『ツ』かる　始まります。

の　ノツピンネェ……急なことになって、急に言われて当惑。
ノッチョキャ…乗っていれば、調子にあわせて、賛成すれば。
ノッコノコ……ゆっくり確かに来る、移動がゆったりと。
ノッテンイイ……話に合わせて、同調するが、仲間に入る。
ノッチ……乗りました、合わせましょう、ゆっくり動く。
ノッケ……急に言われて、急な用件で、無理なな難題を。
ノッケネェ……急な事で理解が無理、予想外な話で、とても。
ノデンヤマデン……いいですよどこでも、了解したので。
ノデン…野でも川でもいいよ、了解したから、こんな事でも。
ノテマクッチ……慌ててしまって、落ち着いて話したら。

ノドカル…待っていましたと、それが何よりの、ほしかった。
ノドユー……とにかくいいから、おまかせでほしいから。
ノドガカエータ喉の乾きが、水分補給を。

の　ノドメーカ……望まないだろうか、望むのは無理なのか。
ノドン……咽の中、咽に関わる不安、咽が重要な器官。
ノドキサネー……咽の調子が悪くて、痰がつまりそうな。
ノドチンコ……咽にある咽頭部分、器官と胃の分岐点。
ノドイチシランフリ……覗いたのに関心なく、見たまではね。
ノドボトケ……頭を支える肝心な場所、器官と内蔵の分岐点。
ノドモチュ…咽の周辺。肝心な器官の場所、健康管理の部署。
ノドニヒツカケチ……咽に詰まらせて苦痛、飲み込みが肝心。
ノドマジデチョンニ…思い出せないいら立ち、ここまで来て。
ノドゴシャ……滑りこみよくて、おいしいものは飲み込みも。

ノナラケーチ……無くならせてしまい、紛失して、盗難か。
ノナラシュ……野原を整備する、広場の整地を。
ノナラシ…野原の整備は今後の価値観、野の手入れは丁寧に。
ノナカン……野原にぽつりある、のはらの一軒家。眺望随一。
ノナケ……野原に立つ宿、野中故に価値観も。、
ノニダセ……野に出して放牧、野原で思い切り育てる。
ノニヤ……野にだすのですか、旅にだして人生教育を。
ノニツメ……野に捜し求める苦労を、野に育てば心配なし。
ノニダス……野原に追放して鍛練を、修行も身の為になる。
ノニオロウ……野にいれば大丈夫、野は自然の育ち場所。

ノニヨリャ…野によっては上下も、高価は精魂が入っている。
ノニデン…野にも上下がある、精魂が左右する、日頃が肝心。
ノニオキャ……野にだしてこそ価値観も、修行が大きく育つ。
ノニヤレ……のに放つ覚悟こそが、野性化が人間を作る。
ノニヤル……野に研修の場を、自然が強敵に育てる。
ノニコス…自然の中にこそ教えもある、素直さは倍力持ち主。
ノニオル……野には教師が多いが、利用せねば無意味。
ノニマジャ……野にまでは心が、広大な心は勝負賀できる。
ノニノヤ…野にあってこそ知恵も浮かぶ、利用する機会こそ。

292882

の　ノネラ……野にいるネズミ、野で生活しているネズミ。
ノノコ…寒いときに着る厚手の着物、防寒目的に作った着物。
ノノカミャ……野に祭ってある神様、土地の神様など多い。
ノノシマユ…外で取り入れなどした後の仕事、後のかたづけ。
ノバナシュ……自由にさせてある飼育、牧場などに放し飼い。
ノバサルリャ…伸ばされるものなら、延ばしてほしいのです。
ノバシチョケ…延ばしてください、延ばして使うと、伸縮で。
ノバセテン……延ばしても、伸ばしたところで、伸ばすのは。
ノバスンカ……延ばしてほしいので、伸ばすと使い方が。
ノバナシ……自由にさせて飼育する、勝手に遊ぶので。

ノバシチャレ……延ばしてあげなさい、伸ばして使ったら。
ノバシソコナウ……伸ばすのを間違えて、延ばすはずが失敗。
ノバソウトン……伸ばしますから、延ばしておいてもよい。
ノバスコター…延ばさなくて、伸ばす予定はない、延期無用。
ノバシチミリャ……延ばしてみたけれど、伸ばしたとしても。
ノビシコ……伸びるだけ延ばして、伸ばした後の縮めるのが。
ノビタンド……伸びましたが、伸ばせば、延びたものの後が。
ノビタゴタル…延びたようですから、延期もいいが後処理を。
ノビチョリャ……延びていれば縮める事も、伸縮も予定に。
ノビタキナァ…延びましたから、延びただけでは、後処理も。

ノビチョルキ……延びている今の内に、伸びた分だけ処理も。
ノビノビナッチ……次次に延期して、延期ついでに改めて。
ノビキッチョル……これ以上は危険まで、後先も考えて。
ノブチーヤツ……生意気な元気者で、太っ腹な若者になった。
ノブンガキマル……のぶのもどうやら止まった、ここまでが。
ノブノン…のぶのも限界か、ずいぶん延びたが、予想以上に。
ノブルンカ……延びますか、延びるのもどうやら。
ノブチャ……のびますよ、延びるのはよいが、棚の準備を。

の　ノブメートン……のばないで、のばないかも、のばなくても。
ノブルンナラ……伸ばせるのなら、長く延ばせば、延びそう。
ノブゴタラ……のぶようですから、のぶと思いますから。
ノベージ…のびますとも、のぶと思うので、のぶ事は大丈夫。
ノベルリヤ……延びるとおもいます、延びますとも、延びる。
ノベレテン……延ばされても、延ばしが出来でも。
ノベシコ…延びるまで続けて、延ばせたのなら、どこまでも。
ノベシチミリャ……延ばしてみれば、のばす手法は上等。
ノベスント……延ばすのですから、延ばしますよ、伸びた。
ノベゴシュ……延ばす腰前がいいから、述べる手つきがいい。

ノベダンゴ……延ばしたダンゴ、延ばしダンゴは上手に。
ノボラルル…登られますから、登れますから、登るのが上手。
ノボセタンカ…熱中して頭がふらふら、湯にあてられたのか。
ノボリソコノウチ…登るのに失敗して、うっかり滑り落ちて。
ノボロドチ……登る予定でしたが、登り方が悪くて失敗。
ノボセチ少し……興奮して頭がふらふらに、湯に長く入って。
ノボボ……原野の隠れ場所で性交、野原の遊びすぎ。
ノボッチヨル……登っているので、のぼったばかりで。
ノボリサコ……上り坂の道を、きあいをいれて登って行く。
ノボロート……登り始めたが、登り坂は勾配がひどいので。

ノボルクレナラ……登るようなら、のぼるのであれば加勢。
ノボッタンカ……登ったのですか、登りましたかあの急坂を。
ノボッチョケ…登っていなさい後から、追っかけるから先に。
ノボッチコス……登ってこそ価値もある、登った記録はよい。
ノボッタマジャ……登ったのはよいが、下りが大変だった。
ノマニャノヤ……飲まなければいいのに、飲むと地金がでる。
ノマンブンナ…飲まない分は甘党、飲まないからと残らない。
ノマンケンド……飲まないのだが甘党でもなし、両手苦手者。
ノマシチョル……飲ませているが、母乳で逞しく育った。

64
29409

の　ノマリュウカ…飲まれますか、飲んでもよいですか、飲料水。
ノマレニャ…飲まれなければ、飲まれないのなら、飲料不可。
ノマレタニ……飲まれたのですよ、飲んでもよかったのに。
ノマレタゴタル……飲料にも適して、相手に都合よくされて。
ノミテーブンナ……飲みたい分は自由に、必要だけ自由に。
ノミタガラニャ……飲むことえの執念、飲むことじゃ悪どい。
ノミテーガ……飲みたいのだが、飲み意地が強い、飲む執念。
ノミトウジ…飲みたくて辛抱できぬ、飲みたさに我慢できぬ。
ノミトリコ……昔の蚤取り粉剤、蚤の多い時代の予防粉剤。
ノミニャユダンスンナ……蚤は病菌の媒介もする、不衛生な。

ノミシコジ……飲みたいだけ飲める、無償サービスな飲み会。
ノムドチ……飲みますよと勢いついて、飲む威勢のよい事。
ノムケンド…飲むのですが。飲んでもきちんと、理性は守る。
ノムシャオルメー……飲む人はいませんか、下戸ばかり。
ノムマジャ……飲むまでは沈思黙考だったのに、飲むまで仏。
ノムナワカル……飲みたいのは理解、飲まれるのは困惑で。
ノムカン…のむようだから、飲みそうな雰囲気で、結局飲む。
ノムワナ……多分飲むでしょう、飲まずには終わらない。
ノメ……飲みなさいどうせ飲むたろうから。早めの先手が鍵。
ノメチョリャ……飲んでいる間は、飲むば機嫌がいいのでは。

ノメレン……飲めないとは、飲まぬとは怖いけれど。
ノメタンカ…飲めましたか、飲めれば幸せでは、飲めば天下。
ノメルル……のめますから元気、のむのだから考えて。
ノメソウジ…飲めますなら、飲んだらいのでは、摂理の問題。
ノメテン……飲めても節度がいいから、飲み上手は好かれる。
ノメンキ……飲めないから、飲まないので、飲む場所でない。
ノメレタ……飲むましたよ、頂きましたのでこの辺で、上品。

の　ノメレメー……飲めないのでは、飲むのは無理なようで。
ノメレタカ…飲めましたか、満足がゆきますか、楽しい会で。
ノメバラ……飲む分は入るから、入り場所が違うようで。
ノメルリャ……飲めれるのなら、ほどほどにしないと。、
ノメタナ……飲めましたか、飲んだ分は次にお返しを。
ノメレテン……飲めても飲めない人たちもいる、心くばりも。
ノメリクウジ……あまり熱中すると、ほどほどが理想的と。
ノメンナワカル……熱中するのも解るが、殻に似合った姿が。
ノモーヤ……飲みましょう、楽しい楽しみ時間に、後味よく。
ノモートン……飲みますとも、飲み意地が悪いと不評を買う。

ノモーチャユウテン…飲むと言っても節度も、理性を考えと。
ノモドチ……飲む様子にゃ、摂理を大事にしないと嫌われる。
ノモアレチ……野原や畑まで荒らして、身辺こそ人間が解る。
ノモウチ……飲みましょうと誘うにも、相手を考えて迷惑も。
ノヤ……親友の心許せる仲なら、気安く声がかけられる。
ノヤキン……野原の草焼きには気をつけて、注意の極点を。
ノヤマン……野や山の、自然の仲で世話になる人生。
ノヤウン……気軽く情愛こめられる、信頼が約束される仲間。
ノヤヨイン…気軽に付き合いの信頼の仲、心許せる人間関係。
ノヤチダレニ……気安く言える仲なのか、言葉使いは大事に。

ノユーナ……のんびりして芯がある、信頼が宿る性格。
ノヨコイ……野良仕事の区切り休み、季節の休み期間。
ノヨゴレ……野良仕事の汚れは尊い、勤労の汚れは勲章。
ノンボリ……上りの方向、上に向かって、上方に進む。
ノンジ…飲んで、伸びて、伸ばして、飲みこんで、理解して。
ノンジョリャ……伸びていれば、飲みこんでいれば。
ノンボリミーチ…上に向いて、上方向に向かって、向かって。
ノンボリクンダリ……上ったり下ったり、上に下に繰り返し。
ノンデンクウテン……飲んでも食べても有効に、腹八分が丸。

△△△　方言単語の旅　『は』⇨『ア』から　△△△

お元気にお過しのことと存じます。単語の説明も２９５５８語に辿り着きました。『あかさたな』の項が　終わり『はまやらわ』に向かいます。いつものように　同じ単語でも言葉になると　意味が異なります。標準語たけでなく　古くからの生活用語で　必ずしも野津原のものだけでなく　各地で使われている言葉も　ありますし使ってはいけない言葉、卑下する言葉　陰湿な言葉もありますが方言集の性質上　お許しください。調査して記録した分が　そのまま歴史の資料として　残せましたのも　ご愛読くださる皆様の　心からのご支援ご協力の　賜物と厚くお礼を申し上げます。

は　ハージョウ…おかあさん、母親、母上、一般的な愛称。
バーサン……おばあさん、祖母、おばぁちゃん。、
ハーラ…びっくりした咄嗟の声、嬉しさ隠す愛想の声。
ハーチュウテン…吃驚したので言い訳、遠慮なしの際。
ハーケー…墓に行くので、墓に行くのですか、墓に行くから。
ハーノー……牛の鼻先を捕まえて、手伝いも大変だが。
ハーミーイリー…牛馬の飼料に入れて、牛馬においしい物を。
ハーヨセンカ……早くしなさいよ、急がないと、時間がない。
バァ…赤ちゃんをあやして、吃驚させるのも、受けて嬉しい。
バァサン……おばあさん、祖母、お留守番の元気な祖母。

ハイイシ……火山噴火で出来た軽い石、火山灰土。
ハイトグ……火山で出来た形成岩、削りやすいので細工にも。
ハイアク……灰をろ過すると出来るアルカリ水、洗たくなど。
ハイトリガミ……蠅取り用の粘着防虫紙、戦後まで使われた。
ハイヨセ……火災の後の焼け跡片付け奉仕、農村の思いやり。
ハイジョキャ……はぎとっておけば、取り除いて奇麗に。
ハイラルル……はいられますよ、入り口が閉めてあるので。
ハイウチ……蠅を叩いて取る民具、棕櫚の葉で上手に作る。。

は　ハイタガル……這いそうな素振り、這うかもしれない有様。
ハイキュウデン……配給ですから、みんなに配ります。
ハイデータド…這い出したよう、這いはじめた、這うから。
ハイッタンカ……入りましたか、入ったようで安心、入る。
ハイマミリ……灰にまみれてしまって、灰に汚れて。、
バイラ……細く使いやすい薪、手軽に使える薪。、
ハイカラボーシ……おしゃれな帽子、新流行している帽子。
ハイツクバル…這いついたままの状態、精魂ついて伏せる。
ハイランカ……入りませんか、入って休んでは、入って。
ハイツチョレ…入って待ってください、入って、入っては。

ハインナ……入ってください、入らないでください。、
ハイリャイイ……入ればよいのに、入って休憩して。
ハイッチョク……入って待っています、入っているから。
ハウゴツ…這うように動く、這うような動きが、這う動作。
ハウウチャ…這ううちは安心だが、歩きだすと注意せねば。
ハウタツアルク…這えば立てとさらに歩けと、親の欲目は。
ハウミリャ……這うのをみると立つ夢に、這う立つ歩けと。
ハウンナラ……這うのなら、もう成長は大丈夫、標準成長。
ハウマジャ……這うまでは大変だが、歩くとなお大変。
ハウネキ……這う側で目を細め、這う子に親心が。

ハウト……這うと立つことが、這えば立つ日はいつか。
ハウンカン…這うかも知れない朝の仕種、這いそうな姿勢。
ハウント……這うようですから、這いましたと、這う喜び。
ハウヌミリャ……這うのを見ると、這う姿は嬉しいもの。
ハウキコス…這うからこそ大丈夫と、這えば次は歩くこと。
ハウカン……這うかもしれない動作、這えば歩くよ。
ハエタデ…うぶ毛ですか、嬉しい成人の印、年頃じゃもの。
ハエンナエ……まだ見えないの、大丈夫人並みに見れるよ。
ハエソコナウ…生えるまでは心配、でも年頃心配ないから。

は　ハエタカン…生えましたか、生えたようです、薄く見える。
ハエモンガチ……早いものが勝ち、早いものが特に。
ハエチョリャ……生えたならもう一人前、あるものはね。
ハエタカシレン……生えたと思うから、湯上がりに確認。
ハエルリャ……入られるなら、入ってもよい、生えたら由。
ハエル……生えたのなら一人前、恥ずかし嬉しい。
ハエチョランジ……まだなので、大丈夫すぐ生えるから。
ハエタラウレシイ…生えたのでもう嬉しい、これで一人前。
ハエタナ……生えましたか、はえたので安心しました。
ハエーノー……早いですね、早いがほっとしています。

ハエタ……生えた喜び嬉しさ、可愛いい姿やはり嬉しい。
ハオモンナラ……這うものだから。這えばこれから先は。
ハオクジル……歯の隙間に楊枝で、習慣になるとつい手が。
ハオトグ…真剣になって立ち向かう威勢、張り切っている。
ハオカミャ…真剣精出せばきっと報いも、頑張りましょう。
ハオカム……精出す、頑張る、熱心に取り組む、努力する。
ハオリャイツデン……羽織は咄嗟に間に合うよう、日頃の。
ハオムシリャ…葉を取りすぎると生育が、無駄な物は取る。
ハオデージシヨ…葉は大事な養分補強道、歯は永久に使う。
ハオカメ……頑張れば報いはあるもの、施しにこそ報いが。

ハカマ…植物の茎についた保護葉、和服の盛装用着衣。袴。
ハガイイ……悔しい、我慢できない、敵は討ち取りたい。
ハカイクカ…予定とおり進んでいますか、能率はどうです。
ハガキルル……力量が抜群で、知的才能が素晴らしい。
ハカンナウマイノー……はかり方が上手で、計量が旨い。
ハガウズク……歯が痛んで我慢できぬ、歯痛に悩む。
ハカソウジュ……墓地の清掃を、お墓の掃除に行きます。
バカラシイ……無駄で骨折り損、話にならぬ話で相手には。
ハカッタゴツ…真面目人間、計画通りの、几帳面な計画で。

は　ハカドラン……成果があがらない、出来に時間がかかる。
ハカワラ……墓地、共同墓地、埋葬場所。
ハカドル……成果が敏速に、早く出来上がって。
ハカリクウジ……余分にいれてしまって、計算間違いで。
バカンクスリャネェ……知能が低いと良薬がなくて。
ハカッチシモウタ…計ってしまって、残りがなくなって。
ハガユウジ……悔しいやら、腹がたつやらもう。
ハガタメ……初めての食い初めに、赤ちゃんに初食を。
ハギラシュウジ……悔しいあまりに、腹立ちまぎれに。
ハギリュー……布の切れっぱしを、再利用に切れ端を。

ハキモンドマ…履物などはきちんと、上品に履きこなす。
バキバキオル……乱暴に折って、始末するのに乱暴に。
ハギトラニャ……はぎとって利用する、資源の有効利用。
ハキノニアルク……履いてすぐ歩行する、試さずに歩く。
ハキハジミャアサド……履きはじめは朝がよい、節度も。
ハキモン……履物、草履や草鞋時代から変換。、
ハキチゴータ……履き違えて、間違えて履くと後が。
ハキソコネタ……履き違えて迷惑を、確認して。
ハクサユウトレ……歯についた汚れは食後に必ず清潔に。
ハクケン……履きますから、吐くから気をつけて。

ハクトキャ……吐くときは用心して、履き違わないよう。
バクゥ……馬鹿な事をいう、つまらぬことをして。
ハグリャミユルド…はぐっては迷惑、見せたくないもの。
ハグッチャレ……はぐってあげなさい前が見えないから。
ハグレタンカ……はぐれましたか、連れからはぐれて。
バクユウタモンジャ……つまらぬ事を言うたもので。
ハグレチ……つれにはぐれて、仲間からはぐれて。
バクリョウ…牛馬の仲介業者、職業の一つで農村に多い。
ハグラケーチ……話からはぐらかとて、旨くごまかして。

は　ハゲシュハル…忙しく張って、急に張ってください、至急に。
ハゲチョル……剥げているので、剥げているようで。
ハゲラシイ……悔しくて、もう腹が煮えくりかえるよう。
ハゲテンアル……剥げてはいるが残りも少し、全部剥げでは。
ハゲルリャ……剥がすのなら、剥がして美しくして。
ハゲタンカ……剥げたのですか、毛が少なくなったのです。
バケンカオー……誤魔化した根性がさらけ出され、本性が。
ハゲタリャ……剥げたりはしないと思ったのに、早く剥げて。
ハゲタトコリー……剥げた場所に留まった蠅、剥げた場所に。
ハゲチャビン……剥げて可愛いらしい姿、美しい剥げ方に。

ハゲシュイク……忙しく行く、激烈な進み方に感激も。
ハゲシュノヤ……忙しそうに往復している、休む間もなく。
ハコンスミュ……箱の隅っこまで監視する、悪質な人間性。
バコユウタモン……とんでもない事を言う、言い過ぎては。
ハコンダナ……運んだものは、はこんだら整頓して。
バコミルド…思わぬ失礼になるから、言葉動作に気をつけて。
ハコカル……箱から出し入れする、箱からきちんと。
バコユウナ…つまらない事は言わない、かえってひんしゅく。
ハコータツル……墓を建てる、新しい墓標も出来て。
ハコーシランヤ…墓は知りませんか、箱に気がつかなかった。

ハゴーカ……剥いでもよいですか、剥ぐけど大丈夫。
ハゴメデン…砕けた米でも使途はあるもの、大切にしないと。
ハコバレン……運ばれないので、運ぶのに苦労するから。
バコミテン……悔しい思いがしても、後悔しても由とすれば。
ハゴイト……羽子板はどこに、思い出の羽子板わ。
ハコゼン……膳箱に納めた食器、箱膳にいれて整頓する。
ハコージョケ……運んでおいてね、運んでくれると助かる。
ハコベレン……運べないので、運びきれないので。
ハコナリ……箱に入ったままに、はこいりのまま開けてない。

は　ハザシュセニャ…葉をさしておけば発芽して苗が、刺目苗。
ハザカジオレ…裸のままで遊ばせる、日陰なら気持ちよい。
バサレー……たくさんな、いっぱいあって、多くの数で。
バサット……大きな音とともに落ちた、突然おちるので。
ハザマンシゴツ……寸暇利用の手間仕事、余暇を生かす。
バサバサ……異様な音がして、耳に怪しげな音が入る。
ハザカジャミユルド…裸の姿は見たいけれど、ちらりなら。
ハザケツンムケ……裸にして着替えさせる、裸にして入浴。
ハザクラハサキ……葉桜は早く咲く、花が葉と調和して。
ハザクル……仲間はずれにする、いじわる仲間にいれない。

ハジケー……肌にいらいらする様、肌さわりが悪くて。
ハジャカカンゴツ……恥は描かないがよいが、思わぬ事も。
ハシゴダン……木製の上りはしごだん、竹製や金属製も。
ハジジカキスチュ……恥じかきついでに上塗りもする。
ハジキワナ……手製の簡易罠、子どもの遊びにも体験する。
ハシガイキチョル……箸使の上手な人、料理人の手裁き。
ハジメチ……はじめての、最初の、一番先の仕種、製品。
ハジケタ……割れる、はじいて割れた、割れて散った。
ハジメガオモド……最初が肝心で、最初がよければ全て由。
ハジイチ……はじけた、割れて飛び散る、突然はじけた。

ハジマクンナヤ…櫨にはまけないように、肌が荒れる事が。
ハシラカス……走らせる、飛び散らす、熱した空気で爆発。
ハジモツツパリモ……恥知らず、外聞もお構いなしに。
ハシンホウ……端の部分、先端の場所、端っこの所。
ハジグレワカケ……恥じかきにも動ぜぬ、恥も不安でない。
ハシラマツ……盆の送り火行事に燃やす行事の用具。
ハジカイー……肌に触る違和感、肌荒れを起こす。
ハジメンウチャ……最初が決め手で、遠慮も大胆も考え物。
ハシッコジ……端の方にいて、謙虚も考えものだが。

63

雑感

◇◇◇　女性の底力　お米賛歌　◇◇◇

首藤チエが野津原に　静かじゆっくり過ごせち　好きな音楽文芸も楽しめる　見こんじ移り住んだだけあっち　周囲に緑なす山や七瀬川ん美しい流れが　じんわり全身を　包んじくるるもんじゃき　単行本を出すまじの　歌が開花しちょつた。そん中ん一遍にこきいあげた　『お米賛歌』があった。

世の中に　米ほず旨いものはない　どんな珍味も　二度食えば飽いて三度は　食えないが　米は死ぬまで　飽きはせぬ　さぁさ食え食え　米ん飯　と絶賛しちょる。

全編通じち交信しよった　　高田ん作曲家に依頼しち　曲がつくと自宅の　座敷じ楽器演奏。作曲家も熱心に　アドバイスもあっちか　素晴らしい歌が　つぎつぎと　生まれよった。こん歌も農家んしたちが　聞いたら　どんくれ喜ぶじゃろうか。戦後チョイト　値もちーたが　ヤンガチ　様式食事に代わり　米ん需要も年と供に　少のうなっちシモウタ。

アカンチュウテン　比べられどまシュウト　見劣りがするき　つい口当たりんいい　もんに飛びつくな　当たりマエン相場になった。昔しゃもう米飯どま　オサイハいらん。魚どまつくと　『飯泥棒が』ち　オコラレタモンジャ。兵隊でん米飯なら　『銀飯』ち言うぐれ　嬉しかったもんじゃ。

百姓ならまず　麦飯に味噌汁　そりーつけモンでんありゃ　もう上等じゃつた。昼も朝ん残りに　干魚でんありゃー　『こりゃウマカロゴタルノゥ』ち　笑顔もこぼれた。夕飯ぁもう　決まったダンゴ汁　飯ん残りゃ　おやじが食うたり　セセロシカリャ　ダンゴ汁に入れちょきゃ　あっさり勝負も早ぇ。これが当たり前ん　イノチキ上手な家庭じゃつた。

疲れても　飯のにおいを香ぎ出せば　のどが鳴る鳴る　唄いだす　甘みも辛みもないものが　なんでこうまで味がよい　さぁさ食え食え　日本米。

昔かる米が経済ん基本じゃつたき　百姓は米を売り　欲しいもんを買う。小作の人は　小作料は　米じ賄う。じゃきすべてが米がカルウチョルき　なるたけ売るこちなる。じゃき夕飯にゃ『タンゴ汁』　朝昼でん麦が入る　時にゃウドン　ソバガあいの狂言にはいる。こげしち米はなるたけ　残しち売る。それが生活上手でんあった。

その昔　祖父が納めた　税金も　祝いの酒も　米じゃもの　花見の友に晩酌に　明日の希望が　湧いてくる　さあさ飲め飲め米の酒。

書いた気持ちも　ゆう解る。米あっての百姓いっか　米がゆう出来たら　豊作豊年満作ち　正月にゃ家族に　晴れ着も買えた。繻子の帯なんか　夢枕じゃつたが　豊作ん年にゃ　もう呉服問屋が　すぐ鱗どま送っちくる。『来たな』　おやじの薄笑いが　何ともエエラシイ。

『ばあさんにもな』　包み紙をあくるんが　おしいような歓喜に　じいさんも　髭面なでながら　『皆がハリクウダカルノヤ』そんくれ言うと　仏壇に線香あげよる。やっぱ家長としてん責任ぬ　毎年感ずるんじゃが　今年ん年の暮れは　異様な嬉しさが家んなかに　漂っちょるんが　ゆう解る。

米が今年ゃ出来た　じゃが来年もた限らん。そりゅう思うとばくちでんある　百姓ん宿命じゃが　せめて皆んな　サカシカリゃいいこちしちなぇ

★★★　女ごん産わき　★★★

女性にゃ大事な　お産をする役目が　生まれた時かる運命づけされちょる。昔ん百姓ん家じゃゆう　『子を生みゃもう大将じゃ』ち本心は　言われよったが　表口じゃ『ほら見よ　数が多ゅうなったき　景気がゆうなるど』　すぐ人んカタンコチニャ　苦口ぅタタキヨッタ。

ジャガ本当は癪にさわっち　仕方ねぇぬ愚痴にしち　言う品の悪い言い回しじゃつた。産婦人科もねぇ　助産婦もおらん時代じゃきせいぜい　キンジョんとりあげバアサン　ソレデンいい方じ　納戸で生んじ家ん皆んなが　世話するソゲナ時代でんあった。大けな腹ぅせりでーち　昨日まじ歩きよったに　赤子ん泣き声がしよる。

隣んバアサンも飛んじ来ち　湯あぶせん手伝い。日ごろゆうしちょきゃ　こげな時はやっぱ助かるもん。『なにえ男ん子え』『そうんごたるな　ちーちょる』　言わずとしれた大きなもんぬ　ちゃんとブラザゲチ　『ばばさん頼むよ』と　言わぬばかりな　大声でぇち泣く元気。

母親になった嬉しさやら　男ん子を生んだ喜び。どっちでん　サカシカリャもう　言うこたねえが　ヤッパ男ん子が　生まるりゃ何かホットする。『じいさん　幟竿ぅ取らにゃの』『そげー思うちもう決めちゃる』『やーそりゃまぁ　手回しがいいのう』『トウミミタヨウナこつー言うな』　もう大笑いがはじまった。

『元気な子が生まれたきな　ゆっくり養生しなーえ』『おおきにすみません』　枕もとまじ来る　親しい人ちが　聞きつけたんか　賑やけーんもいいが　ソットしちょきゃ　それ方がいいにち　婿じょうも嬉しいやら　心配やら。でん子が生まれたなんか　喜びん花節句も忙しかろうが　まずは母子ともに　健康じなぇ。

嬉しい嫁も自分がん　ぶんまじゃ頼めんち　起きかけたら気が効くこと　小姑女が『姉さん　じっと寝ちょりょ』と　そっと押さえち寝かせ　布団の裾かる汚物を　そっととりだすと　外に持ち出した。日ごろはそげーまじ　思うてんみらんに　咄嗟の機転が効くに　嬉しさと改めち　見直す小姑女のたち振る舞い。

どんくれ嬉しいもんか　当の者じゃねーと　解らんけんど女らしさが　見え隠れする　義妹ん処置に目頭が　熱くなった。乳が多いんか一盛り泣いたら　気持ちゆう眠ったごたる子。家族も『落ち着ちいたごたるな』　と　みんな納戸は　義妹にまかせち　笑顔交差しなから外に。義母もわが娘ん処置に嬉しそうじゃ。

女は宿命を背負っちょるき　産脇はでーじシチャラント　それが元じ治り難い病気にも　ゆうなりよった。お産が元じ始まる喫煙もあるし　極端な例じゃ木炭を　たしなむ人もあっち　聞くと桐の木の『炭が一番いい』　とも話しちくれた。壁土ん人、食い物がガラリ変わる人　それぞれが体質の変化か　いずれにしてん　現在考えられぬような　健康被害もあったごたる。

だけに大事にしちゃる　それが家族の責任でんあり　生まれた子どもの母親として　回りの人たちん　情愛ん証でんあろう。母子が無事元気に育ち回復すりゃ　わが家の戦力でんある。幸せな家庭の基礎固めが　世間からも認められ　幸せを喜んでもらゆる　祝杯の喜びでんあろう。

産後の経過がよけりゃ　これから子どもの　成長楽しみつつ家の周囲の　みんなにお返しする　暖かな気持ちも　共に育っち和やかな　発育が約束もされそう。女は強しされど淑やかに　美しさを保って　心豊かな社会に　貢献してほしいもん。笑顔があれば　更に世の中も明るく　楽しい社会も　醸しだされるもんです。

●●● 祭餅ん里帰り ●●●

『おトッタンが悪いち言うき　祭り餅ぅ持っち　里にぃつちくりゃいい』　義母に言われち　いっぺんな断わったんじゃが心ん中じゃ涙ん　出るごつ嬉しかった。『すみません　チッタ甘えもあるんじゃろう　ケンドいつドゲーナルカ』　そこまじ言うたもんじゃき　そん場がダマシ　深刻な雲行きなった。

忙しゅうシコすると　餅ん包みゅう持っち　見舞いにコトズカッタ　包みん品も風呂敷い入れ　ホンガルイにしち　急いだ里まじん道。里に帰る時ん荷物　たぁ　重とうでん　気にも苦にもならん　本心でんあろう。道がちったデコボコ道でん　そりゃもう慣れた道　目をツビーチョツテン　解るもん。

『そりゃー済まんじゃつたなぁ　デーブンいいんで』　娘ん顔色ミリャモウ　いっぺんにゆうなるゴタル。白いもんが増えた　母が髪ぅなでながら　『こいさ泊まっち　いってんイインジャロウ』　久しぶりん娘に　何ぅたべさしゅうか　女親なら誰でんそげーなる　習性が先立つもんじゃき　『おかちゃんな苦労性じゃなぁ』

父親も起けちナイショに来た。決まった位置にどかっと　座るとヤッパ威厳なあるが　やつれた病気ん時にゃ　チット寂しい面影がヨキー　アオシロゥ見ゆる。『しょわねえんな　年も考えんとな』『じゃのう　お前は元気じゃつたんか』　やつぱ娘んことが苦になる。『元気バリバリで』

『みんなサカシインカ』『元気で　チビちゃん来年な幼稚園で』　と言うた途端シモウタち　思うた。ここじ言うと又　気を使う父親じゃつち　反省した。父親はもうそりゅう　頭に浮かべちょるごたる。『入園祝いなんがいいか』

こげな親に育てられたき　あんまり躾もシチョラン　けんどそれなりに家族に　好かれちハリコミヨル。親にしちみると　見舞い口実でん顔色見りゃもう　いっぺんに元気にもなる　妙薬でんあるごたる。『ひさしぶり魚モロウタキ』　刺身にすると『こりゆう運びなぁ』

浮き浮きするゴタル　気持ちじ着替えた姿は　なんか親ん欲目にゃ　ゆう写るもんでんある。婿じょうも優しいし　気くばりしちくるるき　義母さんとん仲良しじ　実ん親子んごたるし　知らししゃ養子取りじゃなチ　言わるるごつ仲睦まじい。それも皆んなが　思い合う譲り合うきじゃろう。

同級生ん近所んしが　遊びやっち来た。『さかしいな　顔色がいいが　ぼちぼち二人目じゃな』『違うでそげーはイノチキガ』『又又トワズいう』『ふんとちゃ』　大笑いがいつまでん　聞こえち父親も元気が　もどったごつ　チョロリいっぱいやったごたる。『りゃーオトッタン世話ねえんな』『今日は床払いじゃ』

来たら帰らにゃならん　じゃがよそに出ーたらもう　他所ん娘になるんが　本人の幸せでんあろう。健康じ過ごしゃそれが　親孝行にもなるき　『病気せんごつせにゃなぁ』　『うっとぅは大丈夫じゃき　オカチャンも　おトッタンも　気をつけなぁえ』『もう　イツチョマエ　家主なったごたるのう』『ご免んな』

大笑いが夜更けまし続くが　宿命はもう明日は帰らにゃならんのじゃ。そこにわが家があり　そこに子どもも　家族も楽しいまどいの場所がある。『喧嘩かすんなや』『……』『病気怪我せんごつの』　『しょわねぇき　あんたどうコス　サカシュしちょてよ』　年は嫌でも押しかけち取る。じゃきサカシュウしち家族が円満じ　豊かな人生こす　幸せじゃろうなぁ。

△△△　女性の底力　方言説明　△△△

３３Ｐ　じんわり…じわっと。くるるも…くれるも。ほず…ほど。どんくれ…どのくらい。ヤンガチ…やがて。シモゥタ…しまった。アカンチュウテン…いけないと言うても。しゅーと…すると。オサイ…副菜。オコラレタモンジャ…叱られたもので。ウマカロゴタル…おいしそうに。セセロシガリャ…煩く言うなら。イノチキ…生活。

３４Ｐ　カルウチョル…背おっている。エエラシイ…かわいいらしい。ハリクウダカルノヤ…頑張ったので。サカシカリャ…健康で元気なら。

３５Ｐ　カタンコチニャ…人の家の事には。ソレデン…それでも。ソゲナ…そんな。ちいちょる…ついている。ブラサゲチ…手に下げて。どっちでん…どちらでも。トーミミタヨウナ…外国式の風による選別機械。

３６Ｐ　そげーまじ…そんなにまで。シチャラント…してあげないと。

３７Ｐ　トッタン…父親。チッタ…少しは。ケンド…けれど。ドゲーナルカ…どうなるのか。ダマシ…急に。シコ…準備。コトズカッチ…頼まれて。ホンガルイ…きちんと背負い。ツビーチョツテン…つぶしていても。デーブン…多く。ミリャモウ…見ればそりこそ。イインジャロウ…よいのでしょう。おかちゃん…母親。ヨキー…たくさん。サカシイカ…健康で元気か。チビちゃん…チイサ子ども。シモウタ…しまった。

３８Ｐ　シチョラン…していない。ハリコミヨル…精出している。モロウタキ…いただいたから。イノチキ…生活るトワズ…冗談を。イッチョマエ…人なみにして。サカシイカエ…元気ですか。

意味も場所によって　多少異なるものもあります。

こぼればなし　あれこれ

昔ん結婚式ゃ決まっち　夜じゃつたき婿ん方かる　迎えが来るこちなる。お嫁さんたちゃ　紋入り提灯ぬ灯しち　行列じ『花嫁道中物語』に　なるんじゃが　そん時にゃ決まったごつ　向こう山にゃいくつもん　灯がともるち言う。狐火とか……いい事か悪い事かそりゃー本当にあったんか　又は若者んヤッカミん　ワヤクか。

女性ん強いんは今ハジマッタんじゃねぇ　そりゃーイノチキもかかる事もあるんじゃろう。

目にスボが入ったき　上手なバアサンが　舌ん先しネブッチな取っちくれたんもあった。どきでんゆう取る　達人もオッチ　安全確実な舌ん　感触療法でんあろう。

ヤサラ売りが大分かる来る　若い娘たちゃ買いたがる　『ヤサラエーヤサラ』　売り声が季節感ぬ　匂わせちもくるる。ハナクソ貝とも言いよったが　娘たちにすりゃ　大好物じゃき　そげんこたーどげでんよかった。時ん流れにゃ染まる　それがヤッパ　よかったんじゃろぅ。

名月様ん晩なヨソン　柿ぅチギッテンいいち言う。けんど柿も葉も黒いき　うまいごつイクジャロウカ。考えち見りゃ夢んごたるロマンもあるなぇ。『俺がチギッチャルキ』　男ん子がイイトコル見する　格好ん晩かん知れん。お月様もイイトコロあるなぁ。かぐや姫ん物語どま　ゆう似合うけんど。

新町じ火事があった…恵良ん若い娘が　『新町が火事じゃ』ち往還ぬオロウジ　端かる端まじツージ　行ったんと。サイレンも無かった時代じゃつたが。なにしてん　女ん底力はオジイゴツなぇ。ジゃきこす故郷も　持つちょるんじゃろうな。

★★★　ちょつと一服　★★★

昔しかる『男ん飯わき　女ん産わき』ち　言う言葉がある。男は農耕にゃ牛馬を使うき　牛馬にもやっぱ　腹ひとつヨコウ時にゃ『食わせちやりてー』　そげな思いもあったが　物言わぬ動物だけに　使いしこ使うんじゃき　そんくれん　気くばりゃせんと　罰が当たるじゃろう。

女んお産になると　これまた大事な役割でんある。１０月あまりン間　腹にじっとだいち　それこす人知らず　育てち頑張る。えーと生まれたらもう　ほかんもんどうが　自分が生ませた　テツドウタち　言うしもおるが　女んお産な真剣勝負　今じこす産院じでん大事に　生まるるが　昔しゃもう納戸じ生む　大変じつたはず。じゃき産後食べれん時にゃ　手を品を替えち　何かたべてーもんぬ　そんくれ気ばりしてん　罰ぁあたらんわけ。

産後ん用心としてち　飯後は腹を右下にしち　寝るがいいらしい。みんなが気をつけち　生んだ子にゃ乳も　飲ませにゃならんが　これも他んしじゃ　ヤッバ悪いごたる。母乳は健康んためにも　最大ん栄養らしいき　それが母子ん為めにも　いいこちなる。そん内笑いだす　這いだす　歩きだす　そんいつでん母親とん　絆が強いもんじゃき　女は苦痛も絶えんもんじゃ。

ナガセが続くと野仕事も　田んぼ以外は出来んもんじゃき　暑いさかりにゃ　昼間脇にゃチョイト　昼寝になった。『チヨィト寝ゴダ打ちするか』　大けな声じ言うもんじゃき　外にまじ聞こえた。ちょうずそん時も時　『ゴザ買い』が往還ぬ通りよった。『こりゃいい所ぃ来た』ち　早合点したそん男　『ゴザわけちくれめーか』『……』　『高うだすき』　『なにごとえ』『いいえ　ゴザ打ちするとか　聞いたもんじ』　とんだ聞き違いん　ハプニング。五助さんも　そん様子見ちょつち　笑うわけにもいかんき　口ぅ押しツビータ。

盆踊りにゃ『薄化粧しち』　参加するんが　礼儀じゃそうな。盆休みでん草切りした　後じ出ちくるごつなる　忙しいともぅチョコット　頭撫でつけち出かくると　年寄りしが気を効かせち『こっち来なぁ』　影んくらすみ引きくうじ　髪ぅ撫でちゃつち　顔も気をつけちゃ　汚れがねねぇか　『これじよかろう』背中そっと押しち　『行っちきなー』

縄文時代かるあった栗　こりゃ１個２５グラム　５個じ飯１杯分のカロリーが　あるらしい。中国かる入ったんが　クリタマバチやられち　全滅したあと　昭和３０年頃に　入ったんが現存しょるごたる。

昔ん距離ぁ１里が３６丁…１丁が３６間。１間が６尺。現在風に言うと　１里が４キロ　１丁がどんくれーか　皆さんお暇に…頭ん体操いかがですか。

干支ん始まりゃ当然　お釈迦様が亡くなった時　駆けつけた順に決まったち言う話。耳んいい牛が一番先　つーじ行く途中じ風ん音にタマガッチ　ネズミがそん牛に　飛び乗った。そこまじゃいいんじゃが　着いた途端にねずみは　サッと飛び降りたき一番になったそうな。猫かる聞かれたけんど　教えんじゃつたもんじゃき　そん猫も犬にゃ教えんじゃつた。

ネズミは今でん猫かる　追いかけ回さるるが　猫も犬から追いかけられる。猫が逃げ回る間に　犬は急いで到着したら　１１番じゃつたが　猫はとうとうカキー　アワンジャツタ。つばくろは拵えに暇がいっち　カキーアワンばかりか　ニワトリカラモ『土食うち水ぬうじょれ』チ　いわれち今も　鳴くときゃソゲー鳴くそうな。どけな時でんツージ　来ちくるるしが　行くしがあるな幸せもんじゃろうなぇ。

『ほうちょぬべぬべ』

この唄は盆踊りにも　使われよった昔ん　『ダンゴジル』　作る時ん口説き唄じゅゃつた。小麦粉を練った《適当ん固さに》　団子を伸ばしち　鍋に入るる時ん　いやーまぁ　調子唄でんナ。ダンゴ汁に入れたり　ヒキノバシチ　『やせうま』にもなった。じゃき使い前はいいし　米を食いのばす　代用食でんあった。

じゃき唄ん内容も　身近ぇ心んコモッタ　そげな唄も多いごたる。昔ん子どもは　子どもん時かる　見よう見まねじ　覚えちょつたき　晩方にどまなりゃ　もうバアサンの加勢　母親ん代わりに　ゆう作り　炊きよったもんじゃ。じゃき親しみやしー　それもあったが　元を正せば　ヤッパ米ん節約が　本音かん知れん。

大分県の古い民謡を　調べよった　民謡研究家ん　加藤正人は余暇に県内ん各地を回っち　野津原にも来たが　そん時に掘り出し採譜したもんじ　とくに口説き踊りも　あったもんじゃき　そんリズムもいいもんじゃき　小学校ん運動会ん　集団演技に取り上げち　加藤正人も　直接応援しちくれ　民謡教室ん人たちと　コンビネーションゆう　完成した。

ホウチョぬべぬべ　今夜の夜食　チリツテシャン　アラ
ヨイショ　ヨイショ
早く　ぬばねば　夜があける　ソンエヤ　ソレエヤ
ヤトヤンソレサ。

盆の十六日　おばんかていッたら　チリツテシャン　アラ
ヨイショ　ヨイショ
なすびきりかけ　フローの煮染め　ソレエヤ　ソレエヤ
ヤトヤンソレサ。

春田起こしに　一服すれば　チリツテシャン　アラ
ヨイショ　ヨイショ
子供がモ　のしろじ虫をとる　ソレエヤ　ソレエヤ
アトヤン　ソレサ。

諏訪の　祭り旗　御輿も着いて　チリツテシャン　アラ
ヨイショ　ヨイショ
呼ばずに　来るのが祭り客　ソレエヤ　ソレエヤ
アトヤン　ソレサ。

谷の水あび　柱松あぐりゃ　チリツテシャン　アラ
ヨイショ　ヨイショ
村の　踊りは十三夜　ソレエヤ　ソレエヤ
アトヤン　ソレサ。

夜があくる…これもどこん家でん　人数が多かったもんじゃき
はげしゅせんと　炊きよってん　時間がかかっち
夏ん夜は　早くあける。

ナスビ　キリカケ…どこん家でん　夏野菜は　決まったもんの
じょうじゃから　バッカリ食いとん　言いよった
。カンラン、キュウリ、ハスイモ、皆おんなじ。

春田起こし…一毛田《イチモウデン》　米だけ作るような湿田で
冬は休ませるので　春になると　起こして田植えの
準備をする。

ノシロ虫とり…苗代の苗に害虫が　卵生み付けるので　この頃に
子どもは一斉にとって歩く。学校も休みにして取る
便宜もあった。

呼ばずに…祭りにゃ通りかかった　知り合いがあると『まぁ祭り
じゃき　寄りよ』と　引きこむ親しみがあった。だか
ら内緒方は大変　準備もせねばならず　神楽見にも行
けないと嘆く一幕も。

□□□　方言説明　□□□

４３Ｐ　じゃつた…でした。いやーまぁ…言えば。調子唄でん…合の手を入れる唄。ヒクノバシ…延ばしてつくる麺類。じゃき…ですから。食いのばす…米の代わりに食いつなぐ。そげな…そんな。どまなりゃ…頃になれば。もんじゃき…ものですから。

４４Ｐ　こぼれ話…案外知らない話　農村の素朴な生活の中での心情や苦労に耐えた　真実を見る知るような。

４１Ｐ　ヨコウ…休む。やっぱ…やはり。食わせちやりとー…食べさせてあげたい。そげな…そんな。そんくれん…そのくらいの。ほかんもんどうが…ほかの人たちが。ヤツパ…やはり。ナガワ…台風などの嵐。チョイト寝ござ…少し昼寝。ちょうず…その時に。わけちくれめえか…わけてもらえないでしょうか。ツビータ…閉じた。

４２Ｐ　ごつなる…そうなる。くらすみ…暗い場所。これじよかろう…これでよいでしょう。やられた…全滅。つーじ…走って。タマガッチ…びっくりして。もんじゃき…ものですから。カキー…間に合って。つばくろ…つばめ。カキーアワンジャツタ…間にあわなかった。ソゲー…そのように。

体が違うだけに男も女も　大事にせねばならぬ　所、時、時間なんかもあるもん。それを大事にしあったこそ　夫婦であり家族であり　生きているお互いと　思います。『イタワル』と　言うのは板を割る事も言えるが　大切にしてあげる　そこに人間的な価値観もあると思う。

後悔は先に立たず　時と言葉は再び帰ってはこない。
一人イノチキはできないが　二人イノチキわできる。
一寸の虫にも　五分の魂がある。それは生きているから。

尋ねるは一時ん恥じ　知らぬは一生ん恥じ。
相手を知り　自分を知るのは百戦にも恐れぬ。
衣食足りて礼節を知る　貧困は最高ん教師である。
親の意見と冷や酒は　今は効かぬが先でき効く。
話上手よりゃ　聞き上手が　旨い話に迷い込まぬ。

駕籠に乗る人担ぐ人　そんまた草鞋をつくる人。
我が田えの水も半分じ　後は他所ん少ない田に。
作つくるより土つくれ　土は作物の母である。
腹も身のうち大食い慎み　腹八分目で医者いらず。
よだれくりは頭のいい子に　千の倉より子は宝。

こげな格言も昔かるん　体験かる生まれた言葉。それを手本にするせんは自由。じゃが覚えち損にゃならぬ。それを実行するかせんは　自身が選別するだけ。知識の取り入れは　欲張りじゃないと言うのは　取捨選択ができる　能力があるからこそ。多くをしって上手に使い分け　不必要なものは捨てる　その勇気が問題になるもの。

五助さんの話がよすぐるき　雨降りどま座敷がいっぱい。ちっと朝寝坊しちおけたら　もう早いしゃ来て　しゃべりよる。もぅと⇨言いかかったぬ　無理やり引っ込めち　手水鉢じひげ面ぅノンボリクンダリ　洗うと笑顔がもうくずれた。『今日は暇じゃろう』　『忙しいなんか言うと　ドクラサルルカンのや』『またトワズ言う』

爆笑が立つもんじゃき　来よったしも『しもうた遅ぅなった』ちツージ　走りくうだ。娘んおみつが　『チョイト朝ママ食べさてな』『じゃのう　早ぅかる来ち悪かったのぅ』『俺が代わり食ぉうか』『これじゃきのぅ』

故郷の歌が戦後になっち　結構ハヤリデータ。野津原も歴史は古い土地がらなんじゃが　ワリカタそげなコター　薄かったんじゃが故郷は楽しゅ　歌うち心が豊かになるんが　早道じゃち血気さかんな若者ぁ　とにかくレコードでんいい　音が人ん心を豊かにするち　コンサートち言うてん　聞きながら楽しむソゲナ場面が　本町、竹の内なんかじあった。

小原青年は自前ん放送器具じ　会場かる夜になると　流しち集まるしたちも　そりー合わせち歌う。じゃき知らんじゃつた歌もいつん　ナカメーカ覚えよった。竹の内じゃ『いつでん使いよ』ち　気さくなイチばあちゃんが　お茶まじ接待しちくれた。青年団も呑気にゃシチョレン　岩下ん佐藤文化部長が　野津原ん佐藤副部長と企画しち　平和座と新福座じ　『農家ん憩い』舞台を各地域かるも出演しち　そりゃもう楽しいもんじゃつた。

遅ぅなってん化粧したまま　テクテク家まじ帰るしじゃが　道すがら先に帰った　人たちかる『今日ん劇にゃ泣かされたで』励ましん声ぅ聞くと　『明日ん番な続きゅう　念入りするかな』帰り道すがら台本が　修正もされよった。それでん楽しみん少なかった時代じ　もてもてじ後にゃ　地区ごとん素人演芸も始まる　引き金にもなった。

盆踊りや鶴崎おどりやら　ヤトヤンソレサ……じゃが余波は思わん所り広がっち　当時学校ん先生しよった　故郷出身者が歌『野津原音頭』を発表した。作曲は矢の原んマンドリン演奏者。

宇曾群山くれない染めて　霧が匂うよ朝山帰り　可愛いあの娘は誰の花　ソレ野津原よいとこ　ソレ野津原よいとこ　よいやな。

七瀬七谷七つの月が　早生を刈る娘の眉引く姿　誰にあげよかこの一穂　ソレ野津原よいとこ　ソレ野津原よとこ　よいやな。

祭り囃子の郷社の森に　何の願かけ晴れ着の浴衣　仇に濡れようか情けに濡れよか　ソレ野津原よいとこ　ソレ野津原よいとこよいやな。

こん歌は主に青年団が歌い　ひろがったがソン前に　古い同じ名前ん『野津原音頭』も　大正末期に作られちょつた。こりゃまぁ替え歌ち言うか　『紅屋の娘』が元曲じゃが　それまじゃゆう歌いそりー　矢の原かる東京におった　小野青年が振りつけしち盆にゃおどりよった。

東は胡麻鶴西は詰サノ西は詰　東西３里の野津原村　トサイサイ野津原村。

胃腸によく効く冷泉はサノ冷泉は　湧いて尽きない塚野の地トサイサイ　塚野の地。

春秋賑わう宇曾山サノ宇曾山　霊験あらたな虫封じトサイサイ虫封じ。

殿様時代の野津原郷サノ野津原郷　お茶屋の跡や城の馬場トサイサイ城の馬場。

河鹿の声や蛍狩りサノ蛍狩り　流れも清き七瀬河トサイサイ七瀬河。

秋葉の山の空高くサノ空高く　功を語る忠魂碑トサイサイ　忠魂碑。

広さも富も人口もサノ人口も　郡内一の野津原村トサイサイ野津原村。

郷土を愛せよ村人ょサノ村人よ　家業に精出しいそしめよトサイサイいそしめよ。

※　歌詞は１０番まであったようですが　捜しだせませんじゃつたき　ご免なさいね。こげなふうに歌詞にゃ　時代背景も香り情愛が心を　和ませてもくれます。作詞作曲された皆様　愛唱されて継承して　くださった皆様にお礼申し上げます。

★　健康確認の手軽な一って　★

朝おけた時に自分がん　健康はドゲカナち　確認する方法もアルジャロウガ　こげな簡単な方法も　あるち教えられたき　チョコット並べち見ました。洗面所じ自分がん　顔みる時にドゲエカナ。

発声するんも大切じゃき　声はだしちょくれな。平均な声じ試しちミチョルクレ。ソレガすんなり　言えたらまず安心。健康もいいでしょうから。後は心落ち着けち　豊かな気持ちじ　一日を大事に過ごしましょう。この時間は二度と　戻らないんです。時と言葉は絶対帰らないのです。

◇◇◇　今日は　いい天気　心も　はればれ。ラリレルロ
パピプペポ

両手を前に出して　落ちない……よかったですね。言葉は素直にでますか……
顔のよがみは　ない……じゃぁ　お元気に　お過しくださいね。

笑顔を忘れない　あなたは優しいのです。心はゆたかに　たった一度きりの　人生です。お元気にお過しを。

施しはいつかは　報いとなっち帰るもの。人間は一人じゃ生きられんのじゃき　出来る事は人の　ためにしておく。それはやんがち　人かる世話になるんです。お釈迦様も最後は　『寝たままでアイすまない』と　懺悔したそうです。でも大勢の　万物がその最後を　見送るのも　世話になった　お返しの気持ち　お礼の自分に出来る　最後の施しなのです。涅槃の絵にも　涙流して
それを隠して居る　果たしてそれは…情愛の現れなのです。

歌う以上の楽しい思いで

大分合同新聞の『移動合同歌のフエッシバル』が　あった時ん事限定１５人に入っち　練習重ねた当日　ほかの人たちん歌い方を見、聞きしたが　結果的には賞には入れんじゃつた。がそん時に彼はふと　気づいた楽しさ喜びも　満喫したと言う後藤君。『惜しかったなぁ』　励ましのつもりが　かえって教えられちょつた。

『みんな旨いし心が　気持ちが通じちょる』ち　悟ったち言う。翌年ん会にゃ参加はしてん　世話係に希望しち　当初かる熱心にそん責任ぬ　果たしちょる姿は　心ん賞も貰えるごたる　態度じ皆んかる称賛されよった。厳しい審査は後藤君も　自己審査と変わらぬ　結果じゃつたそうな。

作詞、作曲したそん人たちん　心が伝わるか　ものまねじゃねぇか　情愛はつけ刃じゃ　すぐサビもつくもんじ　歌の世界は一入な難解もある。係を無事に果たして　晴れ晴れした顔で　外野にいち始めちわかった　歌ん真髄は永久に　『自分がんもんになった』ち得るところ多かったち　晴れ晴れした笑顔に。

人生たぁそしたもんじゃろう　簡単に専門家にゃ　気安くぁなれんじゃきこす　研鑽勉強ん道がある。金ん力じゃ代えない　心ん奥技は執念と真心が　左右するんじゃろう。『こんだ出ちゃどげー』『おおきに　まぁしゃんと勉強しちかるナ』　奇策に返した彼の目の輝きは何か掴んだ　素晴らしい光が伺えたき　なにんかにん嬉しゅうなった。

歌の機会に無理に要請したら　快く舞台に　そん挙動は垢ぬけたプロ顔負けん　歌じあり態度じゃつた。心が込められちょりゃ　人の目にゃ美しくしゅう　写るもんでんあった。『ありがとう後藤君頑張れ』　『はい』清楚な受け答えは清々しい。

●●◎　子ども会の歌　◎●●

昭和２１年暮れに　発足した若草子ども会　そこにゃ早えもんじ　子ども会の歌作ろうえ　元気な子どもん　声に嬉しい賛成ん返事が出た　モンジャキもう　２２年にゃ会員も　１００人ほずになっち　歌もできあがった。嬉しそうな顔に　世話する青年団の　人たちもなんとか　節をつけにゃ悪かろう。

世話役んひとりが務めん　病院の看護婦さんの　お父さんが大分図書館長さんじゃつたき　『よし図書館かる巡回文庫』ん本を借るこちしち　なんとか誰かに　お願いを甘えち　みるこちなった。戦後じゃき経済も悪い　ましてや農村のそりゃ　もう米は供出じ全部すくいあげられ　男手がのうじ　年寄り女子どもがなんとか　しよった時代んこと。

『巡回文庫しますか』　館長さんがこう言う　駄目かち思うたら『珍しい素晴らしい取り組み』と　毎月３０冊を　交換に来る約束じ『若草文庫』が　誕生した。役員の家の土間に　金網かけた本棚もできて　子どもだけじゃねえ　大人も読めるる文庫ができたもんじゃき　珍しい本ども誰かかれかが　読みよった。

1　恵みの光り身に受けて　集う心の僕私
　　慈愛の園に微笑みて　我ら若草子ども会。

2　七瀬の水と宇曾峰に　心を磨き身を清め
　　双葉の旗をかざし行く　我ら若草子ども会

子どもん元気が　いち早く作詞したもんじゃき　世話役も尻叩かるるごつ　本借りに大けな　トランクひっさげち　図書館に行くぬ聞いた　野尻さんは大分バスに　勤務しよったもんじ　こん話しゅ聞いち　会社じ話したら　社長さんの耳にも入った。

『月に１回ん本替えん日』なら　協力しちゃろうえ。野津原線にゃ世話にもなるち　粋な計らいじ　大分バス停留所かる野津原ん間　便宜しちくれた。そりー山室さんが　懇意の大分放送児童合唱団の指導杉田指揮者に　頼んでくれたところ　『私でよけりゃ』ち　二つ返事の曲も完成した。

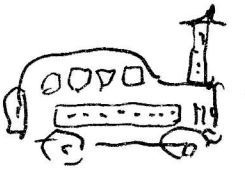
3　導く人や幼き子　悲しみ嬉しわけあえば
　　緑の丘に花も咲く　我ら若草子ども会

4　歓喜の声も高らかに　輝く希望行く手には
　　平和の鳩も訪れる　われら若草子ども会。

戦後ん荒れ果てた故郷かる　無意識に這い上がる　純真な子どもたちん　活動がここまじひろがり　歌もできた春　大分市春日公園じ　大分連合子ども会大会があっち　野津原かる参加したがバス会社も　応援しちくれ　洗たく張り板に　『若草子供会』ち書いた甲板も　バスん車体横に取りつけちくれ　ボンネットんエンシンの前にも　長さ２メートルぐれん　旗をくびりつけち野津原かる　大分バス停留所マジ　本当にうれしい　取扱いしちくれ　車庫にハズシチ保管　帰りも又つけちくれた　バス会社ん心くばりゃ　今も脳裏に鮮明に　残っちょるち言う。

そん頃ん会員も　もう地域ん中堅どころ　故郷振興に努力しちすでに　他界したしもあるが　今も若々しいんは　当時気構えん素晴らしい　人間魂を養うたけんか　心が豊かなら　大人になってん　人に愛され人の信頼もうけ　元気に過ごせるもん。幸せはそげな健康こそが　なによりん鍵。

七瀬川じ水あびしたり　宇曾山につーじ登る　元気印が家庭の主　いや可愛いい　ジイチャン、バアチャンに　なっょるんも微笑ましいもんじゃ。



△△△　何でんござれ　ソリャマァソウジャ　△△△

吉ちゃんな愛敬もいいし　何でんでくるき　便利屋さんでんある。気がねしながら　頼うでん『何でんござれ』ち　引き受けちくるるき　本当に助かる時が多い。農業はもちろん　大工仕事、左官仕事、子守かる針仕事、屋根ん繕い　水番　芸人のごつ役者したり　漫才もやれる。

学校も重宝じゃつたき　子どもが太ってん　万年ＰＴＡ会員になっちもらい　どしてん忙しい時にゃ　拝み倒すほず　やり抜くだけん　技能もあったし　こまめじなんでんしきるき　助かるしが多かった。『なんでんござれじゃな』『まぁな　ケンドちょいと　でけんことも　アルンデ』『そりゃ何な』

言わずと知れた　お産ばっかりゃなぇ。『芝居があんぬ役者が足らんじ』『いいでいつかるな』『セイチわりーが　今かる』『あい』　食いよった茶碗ぬ　そきーおくと　つーじ行く。何か解ったんじゃろうか　知れたことじ　あんしが急に言うな　もうおちん所がチョイト　笑いが少ねぇき気になる。

家にも苦手な場所がある　日ごろん用心もじゃが　宛にする人がおりゃもう　そこが薄手になる。今日もビラビラつーじ来た。又洗濯機に無理こシャリコ　ツメクウダンジャロウ。『洗濯機なそれか』『うん　そん洗濯機じゃが　水が出らんに』『ヒネッタンナ』　何考えたか　自分がん尻ぅ　ヒネリヨル。

『ジャネェ　水道ん蛇口じゃこと』『じゃつたな　忘れちょつた。昨日繕うち　もらうたあと　念のたみー閉めたままじゃつた。『ガマグチャ　閉めてん水道は　あけちょきなぁえ』『じゃなえ　こりゃあスマンジャツタ。『マァ茶でんぬーじ　落ち着くがいいで』『世話しゅじ　農協に』『アリュミヨ　日曜日で』

方言がうまいもんじゃき　年寄りん仲間にはいると　シャベクル時　シヤ方言がでると　『ありゃご免な』『いいこと　そげー若こわなかろうき　方言でん構わんで』『ソリャマァ　ソウジャナ』　照れくさそうに　横向いち笑うもんじゃき　そん髭面が又ええらしい。

『どげえな　こんだ国東ん札所巡り　行かんな』『いいで』『ほんな　悪いんな』『いんげ　いいでち　言うたこと』『そんいいでが　行くがいいんか　それとん行かなくてん　いいんか』『じゃつたなぁ　コラエヨエ』『ソリャマァ　ソウジャナァ』『ありゃ　そりゃ俺が　言うところじやに』

組合に買いんに行くき　近所んしも　誘うちゃろうち　思いよったら一足先に　出たらしい。『行くなら言ゃもぅ』　日ごろかる気安ぅ言うき　『ふんともぅ』ち　しかたねぇ出かけた。所が用足ししよったき　タマガッチ　出ちきたぬ　隣んしが目ざとめると　大声じオラビヨル。

『コキー一人残って　ちょるで』　ヒヨカット　オラブキ振りかえったら　一番足ん悪いしが　泣きべそかいち　涙が頬ぅ流れよる　『もうソウ泣かんでんいい』『なにえ　モウソウじゃネエデ』『ありゃ　そげんこつう　言うたかなぁ』『ゆうたこと』『ありゅう見よ　今泣いた烏が　もう笑いよる。

『誰が泣きよったんな』『いんにゃ　こん前烏が泣きよったんと』『シカトシモネエな烏ばっかりゃもぅな』『ジブンかんこた棚ぇ　あげちょつち』『何え　何か言うたんな』『いんにゃ今日は　ゆう聞こゆるごたる』『じゃがえ　乗せちゃるち　言うたち　隣んジイサマが　い言うき　乗せち　モロウタンジャ　こと』どうやら　ソリャマァ　ソウジャナ　お後がよろしいようじ。

※※※　方言説明　※※※

４７Ｐ　ワリカタ…わりあい。ソゲナ…そんな。いつんナカメーカ…いつの間にか。シチオレン…してはおれない。テクテク…ゆっくりと。

４８Ｐ　それまじゃ…それまでは。じやったき…でしたので。

４９Ｐ　ドゲカナ…どうですか。アルジャロウガ…あるでしょうが。チョコット…すこし。ミチョクレ…見てください。

５０Ｐ　ごたる…ようです。じゃきこす…ですからこそ。どけーな…どうでしょうか。

５１Ｐ　モンジャキ…ものですから。みるこちなった…支援するようになった。のうじ…なくて。トランクひっさげ…物いれの大型をさげて。

５２Ｐ　マジ…まで。水浴び…水浴。つーじ…走って。なっちょるんも…なっているのも。

５３Ｐ　くるるき…いただけるので。ごつ…ように。なっちもらい…なってもらう。けんど…けれど。あるで…ありますよ。セイチ…いそいで。チョイト…少し。ビラビラ…ひらひらして。シャリコ…無理やりに。ツメクダンジャロウ…無理に入れてしまったのでしょう。ヒネッタンナ…つねったのでしょう。ジャネー…ではない。ガマグチュ…財布を。アリュミヨ…あの格好をみなさい。

５４Ｐ　シャベクル…おしゃべりしすぎる。シヤ…間違い。ソリャマァソウジャガ…それはまぁそうですが。どげえな…どうですか。イイデ…よいですよ。コラエヨナ…我慢して許してください。ふんともう…ほんとうにもう。タマガッチ…びっくりして。オラビヨル…叫んでいる。ヒヨカット…突然に。ソウ…そのように。今泣いた烏が…泣いたと思うとのように気代わりが早い。シカトシモネエ…つまらぬ話で。あげちょっち…あげたので。モロータンジャ…貰ったのです。ソリャー…それは。ソウジャナァ…そうですね。

★　知って得する　格言集いくつか　★

経済　多く取るより小取り…多いと気が大きくなるが　小さいと計画的に暮らす。大銭より小銭ち言う　一銭に笑うもんな一銭に泣くたとえ。

三人寄れば文殊の知恵…三人寄れば文字の知恵　金はやっても保証人にゃ　なるな。

稼ぐに追いつく貧乏なし…似合った殻にはいれば　苦労も又楽になるもん。

衣食住　家族が風邪を引くと　ユキヒラじ粥を炊き　熱い時に梅干し一つ入れち　フーフー食べる。

ヤワタラ蛇は　家の主としち　大事にした。

食べ合わせ…カニと氷水。うなぎと梅干し。

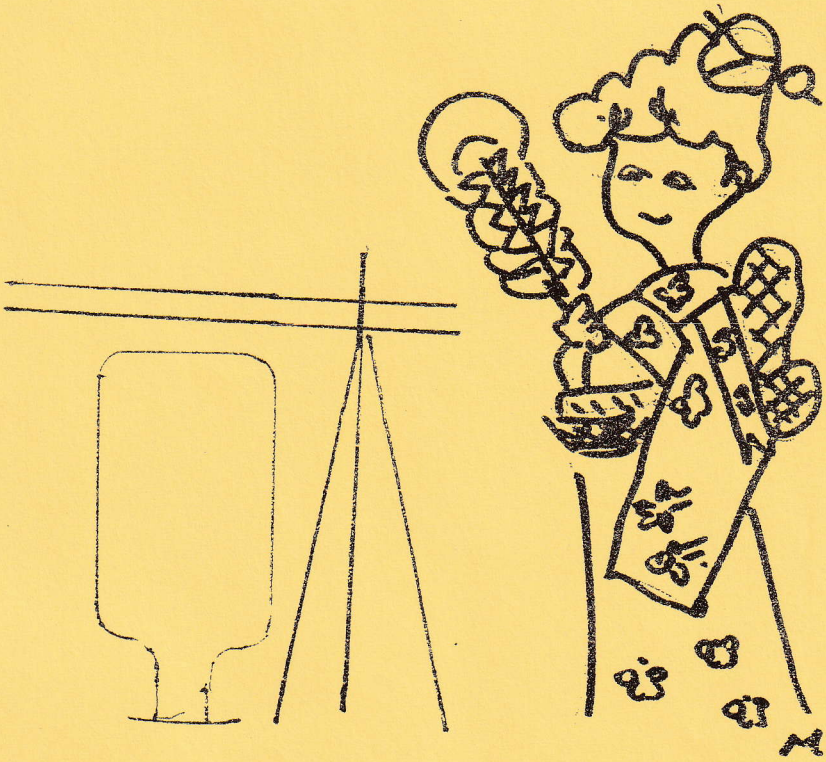
飯炊きんこつ…はじめチョロチョロ　中パッパ　赤子泣いてん蓋とるな。

腐ってん鯛、鯖ん生き腐れ。

商売と屏風は　曲がらねば立たぬ。

古くかる言われた　格言じゃが理屈はあってん　ゆうかみ締めた時にゃ　納得が行く結論も　浮かび上がるごたる。格言の場合は地域、気象、生活習慣なんかじ　異なるかん　知れない。近代の調理の仕方じ　変わる事もありうるが　参考になれば幸いです。

ふるさとの味



大分名物ダンゴ汁

一口に『ダンゴ汁』ち　言うけんど　県内でん多種多様じゃきどれが　本物かち言うてん　ムズカシイナァ。一般的にゃ小麦粉をぬるま湯じコネル。ほどゆうコネタラ　チョイト濡れふきんかけち　寝かせちょくと　伸びがゆうなる。１０分したら適当な　大きさに分けち　押し伸ばしち長くする。

５⇨７センチぐれに　ちぎっち　そりゅう伸ばしち行く。そん日の天気やら　湿度なんかじ違うが　そりゃそれぞれん　家じ決めちすりゃもう　独特なそん家ん　味になるじゃろう。伸ばしたら１５⇨２０センチ　ぐれかな　湯たてた鍋にいれると　はい終わりになる。長さ、太さ、なんかそれぞれん　家じ決めちょくと　そん家んおいしさも　醸しだしちくるる。

こん時に『やせうま』に　しゅうち思ゃ　ゆでたら　ソンママにあげち　水気をきると　『やせうま』ん　本体が出来るこちなる。

ダンゴ汁ん場合は　伸ばしち鍋にいれ　浮き上がったら　もう煮えちょるから　『御上がり』になる。そんまま『だんご汁』じ　食うなら　具財の野菜を　好みじ入れてちょきゃ　あがったらすぐに食べらるる。はじめにイリコ出しでん　取っち野菜も入れりゃ　早く煮立った時に　一番おいしくいただける。

味噌仕立てもよし　しょうゆ味でん上品　好みの調理が　引き立つ『ダンゴ汁』ん　よさもある。夏の暑い時でん　フーフー言いながらも　いいもんじゃが　朝ん冷たいんもいい　又温めたんも　それそれ味わいがあっち　独特な味を　楽しめる。昔かる代用食でんあり　農家ん米を大事に　食いのばす　便法でんあった。

主に豊後ん場合は　伸ばした後　二つに裂いて鍋に　入れる独特な技法も　あっち格別な味にもなる。

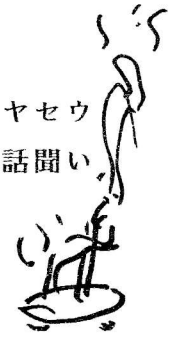
なし『ダンゴ汁』ち　言うかは疑問じゃが　伸ばしち入れたが中じ固まりあうき　ダンゴになっちょる。もんじゃき『ダンゴ汁』になったんかん。伸ばさんまま　セワシイ時にゃ　いれるき　団子ん姿じゃもん。じゃが伸ばす事じ　長いのに濃淡もあっち　特にヤセウマん場合は　濃淡が砂糖やきなこん　つくんが乱雑になる。
じゃが食べる時にゃ　一風風変わりん　料理になるき　珍味とん言う。

『やせうま』た　なし言うんか　これもいろいろ理由があるが馬子が餌もヤラト　ヤラント痩せち　見すぼらしい。にそん馬がいつも　ヒモジソウニ　舌を出しちょるんが　『ヤセウマ』ん　ごたるき　言いでたとか。あんまりあてにゃならんが。どっちしてん食い物ん名前は　つけどころが　いろいろあっち　くわしいこたー　解らんなぁ。

けんど昔かる　代用食ち言わんじ　珍品としち使うなんか　いいことじゃねぇ。米んかわりんなんか　言うとミスボラシュ聞こえること　じゃき『ダンゴ汁』ち言うと　なんか特別なもんがち　見てえな本心じゃこと。殿様料理でん　『落とし汁』があったが　これなんか　殿様が食べよるち　想像しただけでん　おいしそうじゃこと。

じゃなぁ聞きようじゃなえ　米ん代わりに頑張った　小麦粉こす農家ん功労者じゃな。『そうで米がなかりゃ銭がねえ』　のと一緒じゃが　『ダンゴ汁』食いよる　『やせうまんごたる』ち　聞くと食いてーな人情じゃろう。あんきなこん香り　もう盆じのうでんいいなえ。

盆に帰った仏様が　みやげを持って帰るに　縛るにゃこんヤセウマが　固まっち強くなっち　切れんからいいんと。『そげな話聞いたが』『じゃろう』　使い用じゃなえ。



『黒砂糖いり火焼き』

素朴な風格じゃき　田舎まるだしんスタイル。ジャキ人によるとチット　敬遠するしもあるが　いっぺん食べちみると　なかなかドシチ　ソボクが手を振っち　歩きよるごたるき　面白い。

小麦粉を適当な水と　チョコット塩も入れたが　いいち思う。ドロリとなる程度に　溶かした材料が生地。鍋でん鉄板でんいい好きな　道具が仕上がりもいい。油をサット引く　菜種油　ごま油なんかは風味もますき　凝り性んしゃ　それもイインジャネェ。溶いた材料を垂らしち　ひらと一撫でちゃると　平均に焼けるき　片面やけたら　頃あい見ち　刻んだ黒砂糖を　バラリツと　まんべんのう　撒くと独特ん香りが　食欲ぅそそっちくるる。

溶け始めたら片方かる　丁寧に巻いち鍋ん中じ　2、3回せりながら回すと　もう具合ゆう焼けちくれたゴタル。くるくるっと鍋ん中じ転がしたら　もうできあがり。

早く食べる時ん用心な　黒砂糖が溶けちすぐは　熱いき舌を焼かんごつ用心しち　召し上がれ。じゃねえと今日は　接吻できんかんな。大方判断しち　食べられそうなら　熱い時がウメーキ　そん時ぅ記憶しょくがいい。熱過ぎると　砂糖が飛び出し　流れ出る事もあるきな　気をつけよえ。ベベヨゴサンゴツ。

黒砂糖は中じ溶けたら　回りに広がっち　そんまま冷えてん甘みが広がっち　染みくうじょるき　味つきぁ具合ゆう　なっちよるき田舎らしい　食感が楽しめる。焼き立て、暖かな時　冷えちかる　3つん味が楽しめるが　各人それぞれ　好みもあろうき　くれぐれ　口を舌を焼かんごつ　シチョクレナ。

焼きアガッテ平たいももん時　砂糖パラット撒いち　切り分けち食べるも　面白いきこれもお勧め。

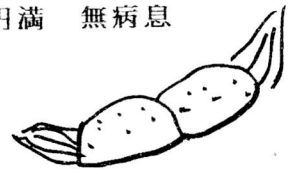
●●◎　『キナコんおはぎ』　◎●●

こんだ『きなこおはぎ』で　こりゃ又簡単じゃき　残りもでんまにあう代物。『おはぎ』ち　言うとボタモチと　どげ違うんなち言うが　昔しゃ　春は『ぼたもち』　秋は『おはぎ』ち　言うしもあったが　そりゃ一春は『ぼたん』の　花が咲く季節じゃき　そげなふうに　連想した。秋は『はぎ』ん花ん季節　わびしい花を　連想する風情も　風流じゃつたじゃろう。

普通『おはぎ』たぁ　米の飯を軸にするが　『ぼたもち』は餅米を蒸して　こねたもんに餡をつける。とされちょるが　所により家によっちも　違うじゃろうき　自分のいいような　親しみがありゃ　いいんじゃなかろか。どっちしてん　昔かる高貴な食べ物じゃつたき　祭りとか祝い事に　つくり供え　差し上げたごたる。

簡単に出来るんが　飯の残ったのに餡をつけると　『おはぎ』が出来上がるき　こん時は　『おはぎ』じあり　きなこをつけると　『きなこおはぎ』になる。チットのこったメシ　目先替えち残った　キナコまぶした『キナコおはぎ』が　膳にならぶと　心はなんか急に　嬉しゅなっち　『今日は何事か』に　なって笑顔も広がる。

何事かがありゃ　変わったもんが　膳に並ぶこれが　生活ん中じ環境が　雰囲気が変わると　気分的にも嬉しい思い。『おさいがねえき　きなこおはぎ　した』　これならモウ　おさいものうでん　いっぺんな事足りる　食事風景ができる。食事準備するお母さん　娘さんや　バアチャンも　時にゃ『手抜きじゃねぇ知恵んお手柄』が　食卓を賑やかにする。『けっくしゃ旨ぇのぅ』　やつぱ好きなもんにゃ　目がねぇごたる。家内円満　無病息災じゃなぇ。



△△△　方言説明　△△△

５７Ｐ　コネル…粉を適当な固さに練る。チョイト…少し。ぐれに…ぐらいに。そりゅう…それを。なんかじ…なにかで。アリャモウ…あれはすでに。いもんじゃが…いいものです。

５８Ｐ　ワシイ…忙しい。つくんか…つくのですか。ヤラト…少しで。ヤラント…たべないと。ヒモジソウ…たべたいよう。ごたるき…ようなので。どっちしてん…どちになっても。けんど…けれど。つけこころか…理由が。ミズボラシュ…貧しそうで。ジャキ…ですから。じゃなぁ…ですね。のうでん…なくても。いいんと…よいようで。じゃろう…でしょう。

５９Ｐ　ジャキ…ですから。チット…少し。ドシチ…どうして。ドロリ…練ったように。イインジャネェ…いいのではないですか。ひらとー…平らに。バラリット…平均に。舌を焼くごつ…熱さに舌をいためないように。じゃねえと…でないと。接吻…キツス。ウメーキ…美味しいから。ベベヨゴサンゴツ…着物を汚さないように。なっちょるき…なっているので。ミチョクレ…見てください。

６０Ｐ　とされちょる…そのようになっています。どっちしてん…いずれにしても。チット…少し。おさいかねえき…おかずがないので。けっくしゃ…結構。目がねぇごたる…もう夢中になって何でも結構のように。

ひとりごと…子どもん頃にゃ　学校かる帰ったら　カバンなそこらに投げでーち　遊びい行くもんじやき　晩がてなりゃ親は捜すんじゃが　なかにゃユルウタカじ　いい頃にゃ戻っち来よった。あんまり帰らんな　隣じ夕飯食いよるなんか　もう珍しゅうわねぇ。

いい頃に帰っち来たき　『やんなどこじ　ヨバレタンナ』　母親にしちみりゃ　お礼を言わにゃナランキ　返事ぅ待つちょつた。『あんな　夕ごはんな　松ちゃんかたじ　ヨバレヨッタラ　竹ちやんが　俺かたコイサ　甘汁じゃき寄れち　言うき　寄っち　ヨバレタ』

コゲナフウニ　子供でん夕飯ん　はしごしよった。それも日頃やっぱ　ヤウチが　ゆうしちょりゃこす。じいさん　ばあさんも　コケマワッチ　笑いでーた。『お前ゃ　大物じゃのう』『ふんとなえ　トッタンヌ　負からかすのう』　こそこそオトシかるなんかダシヨル。じっと皆んなん目線が　そきー集まった。

米ん粉餅が３つ　出てきた。『なにか　まぁ貰い物ぬしたんかふんと』『ちゃーりゃ　まぁ』　『それでん　持っち帰れち言うき』　日頃往生たー　ゆう言うたもんじ　行き先先じ　皆んなが大事しちくるる。素朴な農村じゃが　人情が厚いもんじゃき　他所ん子でん　ムゲネエナ　皆いっしょじゃき　ムドガラント。

こぼればなし…子守がねえもんじゃき　『すまんが　昼まじ子守りしちくれめーか』『……』　側かる　バアチャンが『お前しちゃれ　いいか』『うん』　しぶしぶ返事したのん　今日は学校はヨコイじゃき　そんくれな　手伝いはさせにゃ　ち　思うからん事。『すまんなぁ』　気の毒そうに言うと　突然ヒョウキンニ　『スマニャ　オヨグナ』

スム…潜って行く意味。それが悪いなら　泳ぎなさい、の意味に　噴き出しちしもうた。嫌かち思うたら　頓知もいいところ。『やっぱ親ん子じゃ』ち　感心するやら　嬉しいやら。人生ん巡り合わせたぁ　こげな絆じ結ばれちょる。まさに人生双六じゃろう。

土間のある結びの家物語

『鈴ヶ滝ん恋の花』

近くまじ来たからか　流れ落ちる瀑滝水ん　水蒸気が回りん緑ん葉を潤し　時折運がいい時や　虹も見る事ができる。阿蘇溶岩流がここまじ辿りちーて　もう何億年も過ぎた　そげな夢幻んごたるはるか　昔日んそん流れが　今日も絶えることのう滝壺に乱舞する。

時には若者の語らいが　猛暑にゃにあたり構わぬ　老若男女が肌をしっとりさせ　束ん間の癒しに時が流れた。故郷の数少無い修験場でもあった場所。秋祭りの夜じゃつたか　更け夜のしじまに　若い二人が歩いておりる。神楽見物のあとなのか肌が汗に濡れたその　はだにせめても潤いをと　求めたのか。

神楽ばやしに　更け行く夜は　濡れて見たいナ　鈴ヶ滝
ハ　七瀬のせせらぎ　小鮎が　スイスイ　ホイホイホイ。

あの娘　年頃あねさんかぶり　いつか覚えた　馬子唄を。
ハ　七瀬のせせらぎ　モミジが　チチラ　ホイホイホイ。

恋心をそっと『しってほしいのに』と　燃やして来たものの相手がウブなら　その揺れ動く炎は　燃えるのか。やるせない純情な恋心を　ときめかす乙女の　純情はいつ思いの花が実るのか。時折飛ぶ鮎の銀燐　歯痒い思いを募らせて　徒に時は流れ水泡になって　消えて行く。

『もう帰ろうか』『……』　返事も辛い　けれどこのままここでは　怖さも先走る。とその時だった　水鳥か跳ね音高く水しぶきあげて　『怖い』娘は助けを請う。『セワネエキ』頼りがいもあるような　腕にしっかり抱きしめられた。

時間が流れている　娘も願いがかなったような　怖さも脳裏をよぎりよる。『もう帰る』　催促になるんか　欲望がそうさせるんか　姿体は滝の水シブキと　彼に抱きしめられた　そん熱気とじ流れるのも感じる。『とにかく上にあがろうか』　手短に言うと手を引いて　先に上って行く。

男性らしい力　いつにないような　強情な体力が不安からの恐怖を払拭させた。急いで上る夜道の早さ　人間いざとなれば底力が出ると　聞いたことがあった、まさにそん『底力』なんか。頼もしいとも思い　ついさっきまで抱いちょつた　不安恐怖心は　一気に消え去ったごたる。

『おおきに』　頭下げちお礼を言うと　『楽しかったかえ』ぶっきらぼうに言う　大胆不敵な沈着は　さすが男じゃなぁち見直した。水音はまだ耳に残るが　あの抱きしめられた　あの余韻は仄かに心の中に　閉じ込められたごたる。『これが恋心ち言うんじゃろうか』

真ん丸い月が頭上に赤々と　照らし出されち　二人の幸せを喜んじくれよるごたる。『ご免な　遅くなっち悪かったな』『いいんで　遅くなるち言うちゃるき』『そうな　ならいいが木戸口まじ送っち行くわな』『いいんで　こん角じ』　遠慮じゃねぇ　それほーがよかったき。

『ほうな　ほんな角まじ帰ろうか』『……すみません本当に楽しかった』『な　そりゃよかった　元気しちょりょえ』『あい　こんだ』と　そこまじ言うと　口ごもって先は　話をやめた。考えたんかん知れん　嫌いならと　思いあぐんだ苦肉ん策。なんと話が返るか　おそろしいような　待たれる事でんあったが　そん晩にゃ次は　出らんじゃつた。

七瀬川は私の母　育ててくれた
　　湧水が　肌にほんのり
　　紅を指すのか　瞳も濡れて
　　ツル草　マリつき　わらべ唄。

七瀬川は私の父　叱ってくれた
　　厳しさの　瀬音やさしく
　　いつか別れの　せつなさつらさ
　　ワカ鮎　馬子唄　丸木橋。

故郷ん作曲者がつけた曲が　娘のわびしさに郷愁を誘う。鈴ヶ滝ん流れは『太田川』じゃき　ごく短けーが　そん太田は昔ん話じゃ　久住山系ん東の末端ち言う。北に由布、鶴見が延びち来る。南にゃ阿蘇噴火ん火山噴流が　低地ん川を埋めつくし　固まったそん時にこん　太田川もそれに連れノウチョル。

それが鈴ヶ滝ん奇岩になり　滝壺じ切れたごたるが　チット下っち出会う『福宗川』は　ヤッパ奇岩の固まった　跡が川底一面に敷き詰められちょるごたる。噴流溶岩の固まりん限界は　どうやらこん当たりが　標高が同じんごたる。そりしてんユウマァ川底がこげー固まっち　今でん残っちょるんも貴重品。

豊後街道もこげな地形を　縫ぅち府内まじん路にした　清正も地質に詳しい知能を生かした　領地をもらい受けた策士　頷けるも納得が行くごたる。豊後じゃ敬意を表しち　『肥後街道』ち呼ぶと肥後じゃ『豊後街道』ち　お返しする人の情愛も　伺えるもんじゃ。

七瀬川は私の郷里《サト》　愛してくれた　せせらぎが
　　明日の夢を　しあわせと　胸に抱いて
　　山ユリ　夕焼け　子守唄。

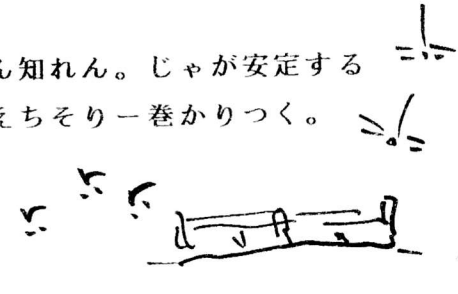
水に関わる話があるき　五助さんどまもう　話とうじコタエンごたる。なんさま今かる　もう６７年前じゃき　昭和２７年《１９５２》夏の田植え時期。

N　宙に投げた苗が　程いい所に落ちた。野津原村じゃ田植えが始まっちょる。そん頃はまぁ　手植えじするき　植え代ができたら　親取りちユウチ　植え畝ん場所に　間隔ん印をつけた綱をひっぱっち　そこにまず植える。そん間隔と間隔ん目に４株植えるから　それをまず　引っ張っち植えたら　後は投げ苗がいい間隔にゃ　落ちちょるき　そりゅー植え手が　取っちゃ植えながら　下がっち行くき　出来上がりが美しい。

それだけじゃのうじ　後ん仕事　つまり田の草取りを　機械を使う　当時はやった『田の草取り機械』　両手で押しながらセル　ヒクを交互にして進むと　車が前後に２つ　ついちょるき　株ん間の土を　回転させながら　雑草を引き取っちしまう。仕事する人も立ったままじゃき　腰の痛みは皆無。植えた時きちんと　行儀ゆう植えたき　縦横に押して　草取りはもう昔んごつ　はい回って取る時代た　想像つかんごつ　楽になり能率もあがりよった。

元気盛りん　しどまぁ　ちったツージ回るぐれ　元気にするきアット　思う目に『田の草とりはオシマイ』に　なりよった。じゃが狭い田や曲がり　くねった田はやっぱ　昔懐かしい植え方じゃき　草取りも昔方式。それが３回ぐれするき　そりゃもうオオゴト　ヒルまじゃ畑ん草取り　昼かるは畑は暑いき　こんだ水ん中ん仕事　若いしたちも　フントゆう働きよったわ。

まぁ農家が心ん安定が　あったきかん知れん。じゃが安定するとコンダ　贅沢がチョコット　顔でえちそりー巻かりつく。



△△△　方言説明　△△△

６３Ｐ　ここまじ…ここまで。ちーち…ついて。そげな…そんな。ろうか…帰りますか。セワネエキ…大丈夫ですから。とにかく…とりあえず。

６４Ｐ　イインデ…よいのです。ならいいが…ならよいのですが。ほうな…そうですか。しちょりよえ…していてください。アトこんだ…ハイ次は。

６５Ｐ　ジャキ…ですから。ヤッパ…やはり。ごたる…ようです。ユウマァ…よくまぁ。どまもう…この人は。

６６Ｐ　話しとうじ…話したくて。稲の苗の束…田植えする苗の束。親取り…田植え用の基準を植えるはじめの植え込み。セル、ヒク…押す、ひつぱる。じゃき…ですから。しどま…人たちは。ちったいとうじ…少しは痛くて。オシマイニ…終わりに。フント…本当に。コンダ…この次は。ちょこっと…ほんの少し。

『仕事に関わる格言のいくつか』

結果は思わしくなくても尽くした　努力は力となって残る。
自分の考えを固辞していては　大きな視野は開けない。
苦手な事でも立ち向かって行く事は　進歩向上の早道である。
仕事がどんなに重なって来ても　今できる事は一つしかない。
心は目に見えなくとも　やったことには心が現れる。
自分が評価している自分より　他人の評価が真実である。
親の希望を押しつけ過ぎると　子供の心に負担となる。

昭和２７年頃は吉田内閣　米の値段は６０キロ当たり　３千円じゃつたが２８年になると　鳩山内閣じ３２８０円。３５年の池田内閣じゃ４１１７円。３８年には５０３０円と　ほんの１０年程じ２千円も　値上がりになった。

そん３７年代ん　世相を覗いち見たら　米の収穫が新記録に。交通戦争いちだんと激化。スモッグ被害など　都市公害がひろがっちょる。堀江青年が　太平洋ヨット単独横断成功。

米が収穫新記録なら　農家の景気がぐっと　ゆうなるはずがどうも農家が豊作なら　きっと影によからぬ　事がハビコル。ジャキいつん世も　農家が倍増収入なんか　夢になるごたる。

ヘモドッチ２７年かる　探っちみろうかなぁ。あれこれが……

昭和２７年…砂糖、麦、が自由販売。電気洗たく機普及。血液銀行設置、茶羽織流行。中小企業倒産多し。

昭和２８年…デフレ時代。ＮＨＫラジオ放送『君の名は』放送その時間銭湯女湯はガラアキ。真知子巻き流行も。

昭和２９年…黄変米騒動、放射能雨。原爆マグロ廃棄。ヒロポン禍。ヘップバーンスタイル流行。

昭和３０年…神武景気、アルミ１円貨幣できる。マンボスタイル。トランジスタラジオ発売。１０円牛乳発売。

昭和３１年…高原景気、ロングヘアー、Ｘライン、ロックンロール、太陽族、クイズ大流行。団地誕生。ＴＶ、洗たく機、冷蔵庫が爆発的に売れる。★⇨１億総白痴化懸念。

昭和３２年…なべ底景気、化繊の着物出現、５０００円札発行ソ連世界初の人工衛星打ち上げに成功。

昭和３３年…フラフープ流行、神風タクシー出現。１万円札が発行サックドレス、ロカビリー旋風。茶色髪流行。

昭和３４年…岩戸景気、カミナリ族、カーブーム。ミドリのおばさん、タクジー個人営業も。皇太子、美知子様ご成婚。

昭和３５年…所得倍増計画、インスタント食品、ガンブーム。国鉄３等車廃止、ＮＨＫカラー放送開始。

昭和３６年…経済高度成長時代。シームレス、ストッキング出現。証券ブーム、酔っぱらい防止法案成立。ドドンパ流行、通勤ラッシュ激化。

五助街道
三助物語
1

肥後街道　『三助物語』　道中旅　1

空海《７７４⇨８３５》弘法大使は　水に恵まれん人や地域ん為に　施しよった水を呼ぶ　真心んオモテナシゃ　有名じ仏願やち水に想い長けた　人でんもあったんじゃろう。水脈ぅ捜すこたぁ　先見の目がある以前に　能力がうかがえよる。こん野津原にも　そげしちみると　肥後街道側じゃ　久住山系ん水脈どまが感じらるる。

今市かる上詰⇨真萱　湛水⇨今畑⇨福宗⇨船平　大田⇨矢の原⇨辻原　大田ん窪にあった　地福寺はそん末端じゃったらしい。じゃき　ここんあたりじゃ　『イノコ』ん水が約束され　飲むだけなら何とか　凌げよったごたる。じゃがそれも　限られたごく一部ん話じ　大けな山をカルウタ場所か　川端じゃねぇと　水にゃ不自由がもう　当たり前じゃつた。

じゃもんじゃき　そんイノコん水に　通う水かたげん姿は　もう風物詩でんあった。風呂どま沸かすとなりゃ　ヨイショヨイショちゃ　水かたげが　大けな負担じゃつたき　『あっきにゃ嫁にゃやりとうねえのぅ』　親ん気持ちがついも　顔に言葉に出る。んもゆう解る。そりゃ心配な火事　人一倍ん用心しよった。

そげな故郷んある　野津原郷に　奇特な人が現れた。そん名も今でん知らんしゃねぇ　水ん神様みたいな　存在んしじゃが　時も時　状況も厳しかった　昔ん事『解っちゃいるけど』　どうにもならん　現実と解決にゃ　至難ん技が待たれよった。谷村にそん救世主が　生まれたんが　寛文元年《１６６１》じゃつた。

旅ん一助は　馬子ん五助さんがん　真剣な顔じ話す　こんコツ真顔じ見つめちょると　一息つくんか　タバコ入れを　センギュしよる。『これじゃねえんな』　足もとにズリオテチョル。

今年しゃ２０１９年《発行が平成３１年》じゃき　アレカル約３６０年あまりになる。今回かるは　『肥後街道』『表往還街道４４２号線』『宇曾山街道物語』に　つづく４回目のシリーズ。馬子の五助さんが　旅人とんコンビじ　毎回そこらそんげを　尋ねち話題ゃ隠れ話、想いで日記、こぼれ話なんかを　ご披露しながら歩きます。ご一緒に旅は道連れしましょうょ。

§　水が顔だす夢まで見たに　嬉し涙でゆう見えん
　　ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホホイホイ　§
§　アオよ　勇めよ　宿場はそこじゃ　あれが街道の石だたみ
　　ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ§

水ん不自由さを　知りぬいちょる　三助は幼少ん頃かる　密かに『こげな不自由さじゃ　百姓は浮かばれぬ』と『たとえ貧しくてん　心は豊かにあっちこす　生きがいにもなる』ち　水に対する執念が　燃え始めちょつた。そん想い苦労が　実っちヌキかる水が　湛水に出たんが　寛永４年《１７０７》　無事に竣工しちょるが　まぁそん途中ん　工事ち言やもう　聞くも涙ん物語り。

ゆうまぁここまじやった　そりゃ恐らく信じられん　考えられん苦労ん連続　ここまじやりとげたち　感謝感激雨霰じゃろう。

★★　三助おどり　★★

1　山が高ぅち　待たるる水が
　　木の葉揺らしち　里につく
　　三助まつりの　涙に濡れち
　　里に帰った　娘も濡れる

2　岩を潜っち　ここまじ来たと
　　顔を覗かす　いじらしさ
　　三助まつりの　揃うた揃うた
　　稲の出穂まじ　よう揃うた

4　長湯早いたち　谷めぐらせち
　　三助まつりが　あん日に馳せち

苦労承知の　淵もある
水は止まらん　横瀬まじ。

『五助さん　こん唄ん３番な　どけなったんな』『じゃろう　そげー言うち想いよった。どしてん漢字が出らんき　仕方ねぇ　もう　カタカナじ　我慢してな』『そげんことな』。

３　ヒサゴ、オオタツ、カギオノ井手が
　実り豊かに　手を貸した
　三助まつりは　嬉しい秋の
　櫓太鼓に　丸い月。

湛水ん記念碑ん前じゃ　盆の供養祭にゃ　踊りがアルキ　こげな唄ん踊りもアルカン　知れんなぁ。昔懐かしい　浴衣姿ん　人たちが踊るぬ見ると　日ごろ見るんたぁ　フント違う姿に　『あん娘はどこん娘なぇー』　すぐ目をつけられち　ヒヨィトスリャ　イイ話にも　結びつくごたる。

子どもも入った　踊りん輪にゃ　盆帰りんシタチモ　入っちょるき　話も弾むし　若いシタチン　賑やけー笑い声が　のどかな農村の盆に　盆帰りした　先祖ん仏様も　きっと嬉しい想いじゃろう。『子どもたちゃ　三助さんぬ　どげー想いよろうか』『じゃなぁ　子ども向けに　作った『方言じつづる　ふるさとん歴史とくらし』ん　本ぬ開いち　見るかなぁ。

★★★　工藤三助物語　★★★

むかしむかんしん　江戸時代じゃつた。野津原ぁ　芹川や七瀬川が　アルモンノ　谷より高ぇに　川ん水ぅコター　出来んジャツタ。そん為ぃ雨水やら　チットン湧水ぅ　旨い具合に利用シヨッタ。ジャガ　いつとき日照りが続くと　もうミズァ枯れち　水不足になっち　米やら作物ぁ　作るに苦労しよった。ヒズウジコタエン　それでんハリコム　ムゲネコサレじゃつた。水不足ぅ見た　三助さんな　『何とかせにゃ』ち　水路作りゅ　始むるこちなった。

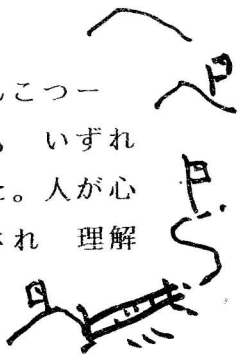
はじめんウチャー　水路が通りやしい道ぅ　捜すたみ土地ん高さん　調べかる手がけた。そん頃ぁナンサマ　豊後ん国ゃヨソン国と　サコウチョル　モンジャキ　よそん領地に入ると　ソレコス大事になる。捕まえられち　殺されたりもする。それこす命がけん　仕事でんあった。

じゃもんじゃき　キコリ、タバコウリ、なんかに化けち　夜になると山ん中を　提灯ぬトビーチ　歩き回るこちなる。長い年月かけちエート　水路や人も通る道ん　地図が出来上がったもんの隣ん竹田領地ん　殿様ん『水引かせち　貰ってん　いいでしょうか』ん　お許しをモラワニャ　ナランジャツタ。三助は覚悟しち　お殿様に　頼みに何べんも　行ツタリシタモンノ　首は縦にゃ振らんじゃつた。

振っちクレンモンジャ　シゴター出来られん。考えち見るとヨソカル水ぅ引くなんか　トテン考えられん　事でんあった。けんどコン水がナケリャ　水路作りも出来んし　村人も苦労するばかりじ　今までん苦労も　意味がノウナル。ナンベン断わられてん行く　そげー覚悟きめた　三助さんな『村人を救う一心じ』お願いを　続けた。

そんあんまりん　熱心さにトウトウ　殿様も心打たれち　川の水ぅ引くこつー　許しちくれた。殿様もそん　真剣さに心がウゴカサレ　タンジャロウなぁ。よかったなえ　三助さん　あんたの優しゅ皆んなを　思う気持ちに　殿様も『うんうん解った』ちほろり涙が　頬を伝わったそうな。

そりゃー自分がん　そげな欲じゃねぇ　村ん皆んなんこつー思うた真心が　殿様ん心まじ動かした。それだけ殿様も　いずれはト　心に決めちょつた……かん知れないようじゃつた。人が心から取り組む時　そこに皆んなの為なら　きっと動かされ　理解もさるるごたる。



喜くうだ三助は　すぐ工事にかかっち　切り立った谷かる谷ぅ伝っち　でぇぶん人数も　世話もオオゴツジャツタ。じゃけんどイイアンベーニ　工事は進んじ　いっときゃもう　『あぁよかった』ち　胸ぅなでおろし　仕事ぅするシタチモ　『コゲンコトナラ早ぅ』ち　自分どうは　ヨダタンデン　ありがてーち　想いよっちハリクウジ　頑張った。

ところが今まじん　喜びやら順調やらが　イッショクタニ　なったごと　大けな岩につき当たった。『こんくれなら』ち　思うチョツタガ　なかなかそれがとてん　固えのなんの　そりゃもうとてん　箸にも銚子にもならんごつ　おおごちなった。苦労は覚悟しちょつたもんの　こげー苦を見るたぁ　ふんともうナシカエ。みんな高い岩を　恨めしそうに見上げよった。

それでん今更　やむる訳にゃいかん　コチンコチン　鑿が岩に当たっちゃ跳ね返ると　ショロリと小石が　堀くずが一日でん弁当箱いっぺーぐれん　ありさまじゃき　『なにしてんのや』晩方になるともう　そきーヘタヘタっと　座り込むありさま。なしこげー　固てぇんじゃろうか『人間の固ぇないいが』

三助も自分がやりよる　仕事がこげーまじ　苦労するなんか考えもせんじゃつたに……そげー思うと焦りも　でちくるんかもうイライラシチ　皆ん顔色見りゃ　『しょわねぇんじゃろうかなえ』ち　心ん中じゃ　想いよったんじゃろうな。『飛びあがりじゃ』『ちっと頭がオカシュ　なったんじゃネエー』

ソゲナ噂まじ広がると　もう三助も夜も眠れんごつ　気持ちがイライラしよった。毎晩考えよるモンジャキ　夜も寝れんし昼も気が　落ち着かんじ　なんかウロウロするばかり。とうとう夜中まじ　寝つかれんじ　明け方になっちシモウタ。『セチナギーノウ』　他ん人夫たちも　それぞれに眠れんごたる。

ところがソン晩のことじゃつた。ウトウト眠れん夜中ん　枕許じなにか　話カクルシガおる。『苦を見よるごたるが』『はい』固い岩に行き渡っち『ニッチモサッチモ　行かんじ困り果てち』『そりゃもう　やむりゃいいに　ヤムルワキャいかんのか』　心にグシッと　刺さるごたる話　『水がねぇ村人ん　苦を見逃せるわけにゃイカンキ』

顔からは汗が　目からは涙がタラタラ　ポトポトリ。今ん心ん中は　『どしてんあん　岩を取っちシマイテーき』　固い強い覚悟が　燃えさかりタギッチョツタ。

『解った　そんなら教えちやろう』　意外な声にヒヨカット目がさめた。まさに自分に何か　知恵を授ちクレヨルゴタルき。畏まった。今から三日三晩　火を燃やしち　岩を焼いたあとにすぐ水をかくりゃ　岩が壊れるから　今ん難渋も避けらるる。それをヤルキガアリャ　やっちみるもいい。が辛く厳しいがそりゅう乗り切りゃ　報いはあること間違いなしじゃ。

そう言うたかち　思うたらパット　消えちしもうた。見回したが　影も形もねえし　今まで通りん　寝床があっただけ。なし自分にそげなコツー　ふっと我に帰った　三助は『まさか神か仏かが　助けちくれたんか』　と脳裏にふっと　浮かんだんは　『そうじゃ　きっと浮動明王の　ご加護じゃろう』

夜のあくるんを待っち　皆んなにコンコツ話した。皆んなも不審もあったが　とにかく『やらにゃ先に進まん』と　岩をドンドン燃やし始めた、立ちのぼる火炎　紫煙が立ちのぼり山肌にまじそん　煙りが行き渡るごたる。『ほら三助さんが』
騒々しいシタチャ　クチクチニ騒ぐが　真面目なしたちゃ燃やし作業を進めた。浮動真言を唱ゆること　三日三晩ソリー合わせち岩に水ぅかけ　鑿が響いたらあん　岩がモロクモ壊れだした。

△△△　人の執念は岩をも砕く　△△△

えーと冷えた岩に　思い切って入れた鑿　あれほど固く難渋した岩が　もろくもソレコス　信じられんごたる　有様に砕け飛び散り苦労が　ここに来てエート　報いられるる　コチナッタ。アゲエ笑うたり　苦情ダラダラん　したちも　改めち三助さんの　信念にもう最敬礼ん有様じゃつた。

サスガン難工事も　見る見るうちー　形が整い予定に乗っち　水路ん母体が進んじいった。三助さんがん熱心さに　村人の苦労にそげー思う心くばりに　やっぱ人間の信は　必ず助け船があり　花は咲くち言う諺んごつ　改めち見直されたごたる。それかる５年ほずしち　水路も見事に出来上がり　水が流れよるぬ　見るにつけてん　苦労ん甲斐があったち　見直されたようじゃ。水路が通ると米も出来る　そん水ん使い方も　広がっち人ん心も　豊かになる。

こげんふうに　野津原伝統文化継承会じゃ　子どもにでん　読みやすく解りやしいー　文じ書いた本が出来ち　功績ん大けな水路ん誘い役　工藤三助さんぬ　後世に残すごつ　書き残したんも　そん人間性が将来　若い人たちん生き方ん　お手本にでんなりゃ　嬉しいち残したもんじ　記録こす大事な役目　消え去り失われちゃ　苦労が水ん泡になるもん。

工藤三助は　寛文元年《１６６１》当時ん　野津原郷ん谷村に生まれた。１６ん時に大龍水路開発ん決意、元禄１１年《１６９８》大龍水路普請奉行になっち　元禄１２年に完成しちょる。３９歳ん時じゃつた。カギオノ井路ん鍵水源ぬ　発見したんが元禄１４年これもやっぱ岡領地内じゃつた。４３歳ん時にカギオノ井路ん普請奉行になり　寛永４年《１７０７》カギオノ井路も完成。後になっち野津原村ん水脈になった　世利川井路ん　マァイウト全身でんあった。

◎◎◎　湛水に水が来た　◎◎◎

§　水ん流れが　涙じくもる　工藤三助しのばれて
　　ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。

§　三里坂道荷物を渡し　うしろ姿に涙ぐむ
　　ハ　七瀬のせせらぎ　小鮎がスイスイ　ホイホイホイ

湛水ん里　ちっとん水でん　デージシナーエ　たまる水こすが
イノチキん蔓じゃきな……それじこん名前がチータント。

大分市ん南西おーよそ２０キロん　所りある小さな村。こんあたりゃ西に芹川、東に七瀬川ん深い谷ぅ　見下ろす台地。下ん谷川にドンクレ　水が流れちょつてん　こん高台にゃ　引くこたぁ出来ん。昔かる水不足にゃ　悩まされよった。そんためーわずかに広がっちょる　田んぼも　チットウん湧水じ　雨水が頼りじゃつた。

じゃき湛水ち言う　村ん名前も『水がほしい』ち言う　村人たちん願いかこめられち　つけられたごたる。そん湛水に今日　水が新しい　水路いっぱいに　オンゴオンゴ流れち来るんと。村人たちゃもう　お祭りみたいに　嬉しゅうじコタエン。ソコニャ村を救った神様んような　三助さんがおったからこす。神様んような　『三助様』たぁ　どげな人じゃつたんじゃろうか。

１３歳じ水路作りを　想いたっち砂山じ　ゆう水遊びゅしよった。『三助さんな　変わっちょるなぁ　あげー水遊びが　面白いんかなぇ』　皆んなはチッタ　あきれるぐれーじゃつた。『三助さん　何しよんの　俺たちとあそぼうえ』　村の子どもたちが誘うが７歳の三助は　それにゃロクに返事せんじ　庭に作った砂山に上から　水ぅ流しち　下ん方に流れち　行くそん様をじっと　見よった。

６９Ｐ　じゃろう…でしょう。さげーしち…そうして。どまが…などが。じゃつた…でした。じゃき…ですから。あたりじゃ…周辺では。イノコ…湧水の飲料水を湛めた池。じゃもんじゃき…ですから。かたげ…肩でかつぐ。コツ…事を。センギュ…捜し。ズリオテチョル…知らぬ間に落ちて。

７０Ｐ　アレカル…以来。ヌキ…トンネル。

７１Ｐ　アルキ…あるので。フント…ほんと。ヒョイトスリャ…もしかすれば。シタチモ…人たちも。アルモンノ…あるが。コター…使うのは。ジャツタ…でした。チットン…少しも。シヨッタ…していた。ジャガ…ですが。ミズァー水は。ヒズウジコタエン…疲労で辛い。ハリコム…精出す。ムゲネコサレ…可愛いそうで。

７２Ｐ　ナンサマ…なにぶんにも。ヨソン…よその。サコゥチョル…境界で。モンジャキ…ですから。トビーチ…灯して。モラワニャ…許可してもらわねば。ナランジャツタ…ならなかった。行ったもんの…訪ねたものの。クレンジャツタ…貰えなかった。トテン…とても。ノウナル…無くなる。タンジャロウ…たのでしょう。

７３Ｐ　イイアンベー…具合よく。シタチモ…人たちも。ヨダタンデン…始めなくても。イッショクタニ…共に。チョツタガ…思ったが。ナシカエ…どうしてです。コチンコチン…固くて。ショロリ…ほんの少し。こげーまじ…こんなにまで。しょれんじゃろうか…大丈夫か。飛びあがり…あらましな。セツナギー…悲し過ぎて。

７４Ｐ　カクルシガ…話する人が。ッチモサッチモ…どうにもならぬ。ヤムルワキャ…やめられない。グジット…酷い言葉。イカンキ…だめです。シマイテー…終わりたい。タギッチヨル…沸騰している。ヒヨカット…急に。クレヨルゴタル…頂けるよう。コンコツ…この話を。ドンドン…激しく。シタチハ…人たちは。ソリー…それに。

７５Ｐ　ソレコス…吃驚するような。エート…やっと。アゲー…あのように。マァユウト…言うならば。

７６Ｐ　ドンクレ…どのくらい。オンゴオンゴ…怖いように。コタエン…たまらない。ソコニャ…そこには。ロクニ…少しも。

五助さんが　旅ん連れのうた　一助さんとん『三助さん』の　話しゅスルンモ　なんか流れがいいなぁ。五、三、一、そげぇ思わんかなぁ　そげー言われちみりゃ　ふんと流れがいい話。人間の巡り合わせちゃ不思議なもん　これが『一期一会』ちも　言うんかな。始めち出合ぅたけんど　それきりかん知れん。じゃき大事にせんとなえ。

涙拭きながら　旅ん一助さんな　嬉しかったんか。きにょう久住ん　荷積場じチョイト　加勢したもんじゃき　ヤゼンナ一緒の宿に泊まった。木賃宿にゃ　昔しゃ焚物の木を　出すんが決まり。今は通貨ん　銭じ払うもん。今市かる野津原に　くんだり下がっち　府内まじ糸ん仕入れに行くんと。

紆余曲折ん世の中じゃが　捨てる神ありゃ　助くる神もあるもん。そげな話が意気統合。『こいさ』も野津原にち　言うと『わし方え泊まんなぁ』に　なったき　連れのうち　野津原まじ人生双六。夜話じ出た『三助さん』の　話がもう励みになるき　道中聞きながら　関わった場所、人、物にも触れてーごたる。

子ども向けん話じゃ　やっぱちっと物足らんのか　けつくしゃ考えも想いも　シャトシチョル。ニサンニチ天気らしいき　足取りもいい。引かれた馬んアオも　そげーなるじゃろうち　解っちょったごたる。鼻息じセセラ笑いながら　『五助のタヘラク話聞くか』ゆっくり　帰るるこちなった。

怪器語

79一

は　ハズリー……はずれなさい、外に出て見学、離れてみる。
ハズジョル……弾んで喜びが、嬉しさに浮き浮きして。
ハズサルル…外されました、別に離して、外して別にする。
ハズサンジ……外さないでください、べつにしないで。
ハズシナァ……はずしてあげなさい、べつにしてあげて。
ハズレタ……外れました。別になってしまい、離れました。
ハズシチ……外して、別にしてください、離してください。
ハズシチョキャ……はずしておけば、べつにしておくと。、
ハズレン…外れないので、べつにされないので、壊します。
ハズルル……べつになる、はずれます、べつにしますから。

ハズミン…咄嗟の弾みになった、弾んだ時の動作、急展開。
ハズミニャ……はずむものですから、急に弾んで動くので。
ハズルド…急に開いて、はでて飛び散る、割れて飛び散る。
ハズンジョル……弾んでいますので、気分が上気して。
ハゼチョリャ……はでて飛んで、割れて飛び散って。
ハゼニャ……櫨には用心して、櫨まけは皮膚湿疹に。
ハゼタナ……はじいて割れたのでは、割れて飛び散った。
ハゼンウチ……はぜないうちに、割れないウチニ。
ハゼマクッチ……爆ぜて割れ飛びちる、飛び散って。
ハゼクル……嫌って仲間にいれない、仲たがいする。

ハソジョリャ……挟んでいると、はさんでいれば。
ハソウジイイカ……挟んでもよいですか、はさんでいいの。
ハソウデン……挟んでも、はさんでしっかり、はさむのも。
ハソウジョケ……挟んでいてね、はさんでいてほしい。
ハソーダソベ……挟んだ側に、はさんでいるまわりで。
ハソダナ……挟むのなら、そっと両手で、股間に、そっと。
ハソウジコス……挟んでいればこそ、挟んでいるなら。
ハソウダチ……はさんだのよと、はさんでいますので。
ハソウダヌ……はさんだのを、挟んだ後はそっと、挟んで。

は　ハタンコチ……よそのことにまで、人の事まで関わって。
ハタラキャ……働いていれば、精出しておれば、頑張れば。
ハタキコヤシュ……畑に肥やしを入れて、畑の土を肥やして。。
ハダグイ…間食をする癖、不規則な食べ方は、きちんと食べ。
ハタクル……開いて、股間を開いて、大げさな開き方は。
ハダシジ…素足のままで、履物をはかないで、ハダシンバラ。
ハタカリクセ……股間を開く癖、股間を遠慮なく開くが。
ハタクリャ……開きすぎて恥をかく、程度もので品位も。
ハダケタガル……仲間はずれにしたがる、仲良しを嫌う性格。
ハダケ……仲間はずれにする、仲良くしない性格、友達選び。

ハダグイスンナ…間食はよくないので、きちんと三度の食事。
ハダケチョケ……仲間はずれにして、仲間にいれない悪質。
ハタビャコマル……生理の日は避けないと、生理日は不衛生。
ハタクリオウチ……開きあけて品が悪い、品よく開いて。
ハダグイヤシボ……間食好みで下品な、きちんと食事の癖を。
ハタケオコシン……畑を起こして、天地の裏転作業。
ハタタテ……旗日に旗を建てる場所、祭り幟の立て場所。
ハダシジ…素足のままでは危ない、履物を履いてでましょう。
ハダツキ…肌にきちんとつける財布、馬引き仕事の人の用心。
ハダンナカメ……余暇の時間に、暇の時間を利用して。

バチオウチ……ひどく叩かれて、暴力でいじめられて。
ハチワルル……ひどく割れてしまう、乱暴に割れてしまった。
ハチクリオウチ……急に乱暴にぶっつかって、急にぶつかり。
ハチリン……七輪の上に薄い棚を乗せて、隙間利用の使い方。
ハチャモドセヤ……みな食べてもよいが鉢はもどして。
ハチンスミー……鉢の隅にのこったご馳走はおいしいもの。
ハチドマネブルナ…鉢はなめたりしない、下品に見えるから。
バチアワセチ……乱暴に叩いて、厳しく叩いて攻めた。
バチオウチ……ひどく苛められて、厳しく叩かれた。

は　ハチガクニ……蜂が心配で、蜂がいると怖い、蜂に弱いので。
バチャヒトナミ……罰当たりは人並みうけます、一蓮托生。
バチクリアゲチョケ……全てを没収しておけば、取り上げて。
バチーアウシ…ひどい目に逢う災難、災難はいつ降り掛かる。
ハチャアタンナ……蜂にはアタラナイヨウ、蜂には用心して。
ハチリンナコマル…人並みないと困るが、すこし相違がある。
ハチグリ……割れて醜い格好に、散らばったような業態に。
バチアタリメガ…悪は必ず報いがあるもの、誰かが見ている。
バチットシミー……きちんと閉めて、奇麗な閉幕に拍手が。
バチクリアガッチ……醜態のような格好になって、醜い有様。

バツカリ…そのものダケニ集中して、片寄った食べ物は悪い。
バツクリエーチョル……大きな口を開けて、吃驚する姿に。
ハッチモミッカ…物貰いも三日すれば、三日で根気も決まる。
ハツモンノナガイキ……初物食べて７５日長生きの諺。
ハツチー……物貰いの人、門口にたって物乞いする。
ハットカマゲ……古くの農業用８斗入る藁製農事用袋。
バツチョロ…竹の皮を利用して雨具用帽子、農家の生活備品。
ハツチョギネジャキ…手八丁口八丁とつわもの。機転英知も。
バックン…蛙、農家とは付き合いの多い動物の一つ、ワクド。
ハツヤマ……手明けて初めての山仕事行き、縁起とて使う。

ハツオロシ……着物履物など初めて使う事、朝に卸すのが。
パツチン…紙製の子どもの遊び道具、遊びの方法も多種多様。
ハツルゴツ……叩いて削り取る作業、石工や建設業など。
バッチリ……予定通りに、性格に仕上がる、思い通りの。
パックリ……飲みこむ、口にくわえる、捕まえてしまう。
ハッケクシュ……芸達者、いろんな事に、多種多様にできる。
ハッタインコ……麦を煎り粉にした食べ物、コガシ。
ハツドマリ……新婚夫婦が里帰りの最初の泊まり、初里帰泊。
ハツリャ……叩いて削れば、余分な場所を削り取る作業。

は　ハテシノクル……つぎつぎと押しかけて、引く切りなしに。
バテイグリャシャント……馬の爪に鉄の保護具しっかり。
ハデシャ……派手好みな性格の人、いつも目立つ衣装で。
ハデコノミャ…派手過ぎて嫌われ、風体と格好が不釣り合。
ハトータチー……旗をたて、旗立てに苦労するので。
ハドサレチ……外されて嫌われ者、いつも粗野におかれる。
ハドサンチ……外さないよ、勘違いしないように。
ハトー……鳩を捕ったから、旗を立てて祭りの準備。
ハドメン……車止めにして動くのを防止、静止役も必要。
バトリ……場所取りして芝居見物、場所をとって花見でも。

ハナクチ……一番手前の、近い場所の水の入り口の。
ハナンス……鼻の穴、空気の出入り貴重な場所、呼吸口。
ハナクソ…鼻の穴にたまる汚物、衛生には注意して。清潔。
ハナシガイ……放牧された牛馬、広い場所での放鶏飼育。
ハナタレ……鼻汁がよく滲みでている状態、昔は多かった。
ハナト……端っこ、先端、出張った先端。
ハナ……鼻、花、はじめ、最初、先端、かかり、はじまり。
ハナデン……花でも、始めでも、先端でも、鼻でも。
ハナタリュ……鼻汁が滲みでる状態、小さな子ども。
ハナンクチャ……はじめの時は、最初の間は、かかりには。

ハナモイツトキ…花も一時あり、何事にも時期季節がある。
ハナンウチャ……はじめのうちは、最初は、滑り出しは。
ハナシナラン……話しても無駄なよう。相手にならぬ有様。
ハナシチョケ…離しておけば、放しなさい、話してみては。
ハナクチドマ…最初の場合は、入り口はよいが、内容複雑。
ハナトニャ…入り口には、用心しないと、危険に逢いそう。
バナナン……おかしくない男性性器の、夢や謎予想以上の。
ハナカル……はじめから、覚悟と信頼。相手にもよるが。
ハナオドマ…下駄履物の鼻緒しっかりと、途中事故も肝に。

は　ハニーツキー…鼻につけてよくかいで、鼻元でよくかいで。
ハニャキオツキ…葉には気をつけないと、葉には用心して。
ハニデン…歯などにも、葉などにも、葉にもつけてあげる。
ハニミズ……葉っぱにも水をかけて、葉に潤いを与えて。
ハニシム……歯にしみるように、虫歯があるので染みる。
ハヌヒケ……鼻をひっぱって、牛の鼻先を引きながら。
ハヌル……跳ねまわるので、跳ねて元気がよいから。跳躍。
ハヌトレ……鼻先をとって耕す、鼻先を捕まえて作業を。
ハヌンナキオツキ……跳ねまわるのは用心して、跳ねたら。
ハヌルゴタリャ……跳ねるようなら注意して、跳ねるなら。

ハヌリャイイ…跳ねさえすれば世話わないから、跳ねたら。
ハネノバシ……羽を伸ばしてゆっくり休む、真剣休める。
ハネテン…跳ねても心配ないから、跳ねた時は元気がよい。
ハネル……別に外す、跳ねますから、跳ねたら用心を。
ハネニャ……跳ねないと、外すことに、別にしましょう。
ハネツクロイ…ゆっくり休んで次の仕事に、しばらく休息。
ハネチャリャ……はずしておけば、跳ね飛ばしておけば。
ハネマワル……跳ねて暴れ回る、跳ねて元気がよい。
ハネーチャレ…離してあげては、放して遊ばせ、話しては。
ハネチコス……跳ねてこそ役立つ、跳ねたら大丈夫。

ハノツモウジ……鼻をつまむほどの香り、嫌われ者で。
ハノヘシオル……鼻が折れるくらいの香り、鼻持ちならぬ。
ハノヒケ……鼻をひっぱって、鼻を引くと言う事を聞く。
ハノヒイチ……鼻を引いて農作業、鼻引くのも後少しで。
ハノヒツカケチ……自慢ぶって相手にしない、うぬぼれも。
ハノカメ……鼻をしっかりカンデ、鼻をきちんと始末して。
ハノヘシオル…じまんすれば批判される、人が知っている。
ハノウズカシ…歯が疼くので、歯痛に悩んで、虫歯のよう。
ハノドマ……鼻などは清潔に、鼻は大切な臓器だから。

は　ババイー……眩しくて、まぶしいので、目が悪くなりそうで。
ババン……祖母の、おばあさんの、高齢婦人の総称。
ハバヤッチョル……祖母が成果を見せて、ばばさんやります。
ハバサンナヤ……ばはさんはどこに行った、祖母はいないの。
ババゴシキュ…ばばさん連中のお話会、賑やかなばあさん連。
ババチエ……ばばさんの知恵は実体験、ばばさんの英知。
ババゴシキ……ばばさんたちのオシャベリ、賑やかな話に。
ハバキク……顔がひろいから融通が、顔役の仲間だから。
ハブトカヤス……怒り回って猛り、トメドなく怒りまくる。
ハブリャイイ……馬力がよいので元気だす、威勢がいいから。

ハブタヤメチョケ……調子乗りすぎぬよう、程度ものだから。
ハブタカヤス……勝手に怒りまくった醜態、程度物だから。
ハブリンタヘラク…馬力がよいのでつい顔に、人並みがよい。
ハベートッチョル……幅広くとる態度はどうか、ほどほどが。
ハベーアワン……幅の割には行いが、不言実行こそが花。
ハベオウタカ…幅にあう行いこそ人に信頼も、言うだけては。
ハベアウメー……幅にあわない大きな帽子、似合うものとが。
ハベユウアワシ…自分の空にあうものが似合う、程度もので。
ハベアヤ……幅に合うのなら似合うが、似合わぬ格好もある。
ハベイイド……幅にちょうどよいから、格好いいのも持ち前。

ハボーヨメ……幅をよく計って、似合う寸法で。
ハボトル……幅をとるけれど、すぐ譲る謙虚さ。
ハボミリャ……幅をみると、似合う格好がよい。
ハボアマッチ…幅が多すぎて下品、程程が品位に。
ハボヤッタド……太ったらしいが、バランス問題。
ハボトッタニ…幅をとっても品よく、似合うなら。
ハボトベ……幅を飛んだら、自信にもなる。
ハボミラニャ……幅をみれば粗末に、調整が大事。
ハボフメ……幅をよく見極めて、確実な方法で。

40254

は　ハマッタ……ぐあいよくはまりました、うまく入りました。
ハマンナ…はまったのは、はまっては危険、はまらぬがよい。
ハマル…はまりました、ぐあいよく入りました、ぴっしゃり。
ハマラスル……はまらせてもよい、中に座ってもよい。
ハマラメン……歯と性器と目が順に老化する、年と老化は皆。
ハマラニャ……入らなければ、入らないなら修正して。
ハマリソコネチ……入り間違えて、無理は禁物ゆっくりと。
ハマリャコス……入ればこそ、うまく納まれば確実に。
ハマルナ……入りましたか、ぴたっと入れば、正確に納まる。
ハマレートン……入りますとも、正確に出来ているので。

ハミュー……牛馬の餌を、はめてみますか、入れば正確。
ハミダジャワリー……牛馬の餌だけでは心細い、濃厚飼料も。
ハミュヤレ……餌をやってください、飼育が重要な役割。
ハミデーチ……はみ出してしまう、少し寸法が違うか。
ハミデン……餌でも、飼料でも、牛馬の飼育には欠かせぬ。
ハミュウサキ……餌をさきに配って、飼料配合が大事。
ハミデータンカ……寸法が違法ではみ出す、設計ミスかも。
ハミイレチョケ…飼料をいれて食べさせる、飼育は念入りに。
ハミンソベ…飼料の側に、飼料に気をつけて、気配りも大事。
ハミオケ……飼料をいれる桶、餌の入れ物で、牛馬の食器。

ハムリャ……はめたなら、いれたので、挟んで仕上がりに。
ハムクウチ……餌を食べたならもう大丈夫、飼育の難しさ。
ハムルリャ……はめられたのなら、挟む事ができたら。
ハムルカ……はめますか、挟んでみますか、はさめば納まる。
ハムンナ……はめなさんな、はめないで、挟むの少し待って。
ハムコウテン……立ち向かっても、とても勝負にはならぬ。
ハムコウチ……立ち向かったが、手ごわい相手だから。
ハムカヤ……食べますか、たべているようだから、食べます。
ハムコウチミヨ……たちむかったら大変、関わらないがよい。

は　ハメクウジ……入れてしまった、上手に納めて、ぴったりと。
ハメチユウアウ……合わせてぴったりと、うまく迎合した。
ハメシコ…入り具合がよいようで、組合せがうまく一致して。
ハメレンゴタル……入れられないようで、はいるのが至難に。
ハメニャ……はめて見ないと、合わせて確認して。
ハメチョキャ…入れておけば折り合うのでは、合えば大丈夫。
ハメタ……入ったようで、合わせてみれば確実、結合する。
ハメタンカ……入れてみましたか、確実にはいれば成功。
ハメタガル……合わせてみれば安心も、作った試験も必要。
ハメラレチ……入れられたので、はめて確認も大切。

ハメタナ……結合すれば成功の度合も、出来た確認こそ。
ハメタソベ……合わせた側で確認、見て確認すれば安心も。
ハメチモラウ……入れてもらう喜び、誰でもとは行かない。
ハメタナビシャリ……入れて結合度がすばらしい、喜びも。
ハメンデン……入れなくても感触がた探知出来る、相思相愛。
ハメチャリャ……入れて見る歓喜は、口には言えぬ味わいも。
ハメテン……入れてみたが予想とは、意外な場合もあるもの。
ハメニャセク…はめないと仕上がりの確認が、先が急ぐので。
ハメリュカ……はめてもよいですか、入れて確認すれば納得。
ハモゲン……歯が痛み取れてしまう、大切な歯を失う切なさ。

ハモウルオウチョル……歯が元気なのは潤いも、歯を大事に。
ハモカエチモラエ……下駄のはまを取り替えて、歩きにくい。
ハモスゲカイ……刃の取替えは能率もあがる、道具の整備。
ハモスギ……刃も補修する事で使える、刃が切れると効果大。
ハモハミ…下駄のはまを取り替え、足もとの整備は美形にも。
ハモサセ…刃の差換えで切れ味が違う、機械整備は能率保証。
ハモノナラケーチ……下駄のはまを落として、すぐ補充を。
ハモメモ……歯も目も大事な人間の道具、一生の道具でも。
ハモシャンテェ…歯もしっかり揃って健康、健康こそ幸せの。

40422
61

は　ハヤラン……流行させてあげる、みんなに教えて。
ハヤッタ……流行したので、ひところみんながしていた。
ハヤメシ……早く食べる癖の人、時期より早めにすます。
ハヤケツ……早くきめてしまう、異性を追いかけまわす。
ハヤラン…早く食事をする性格、農繁期の中間食…おやつ。
ハヤリキモン…流行する衣服、突発的に流行する珍しい物。
ハヤリキョウゲン……俄かに創作した舞台劇、素人芝居。
ハヤカリャ……早かればよいとは限らない、早ければ得も。
ハヤスゲタ……早すぎた場合、早合点して来た、早期発見。
ハヤラシイ……流行させなさい、普及してよい方向に。

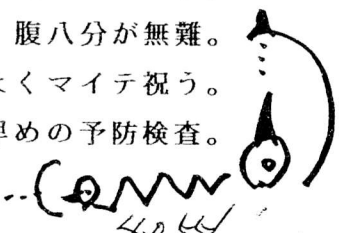
ハヤスゲタ……早すぎて、早くて待ち疲れる、日時の誤解。。
ハヤリャコス……流行すればよいが、逆の場合もある。
ハヤルゴツ……流行するように努力、努力しても無駄も。
ハヤラニャ……流行せねば切り替えも、転換する勇気も。
ハヤガニュ……急いで動くかに、早く鐘を叩いて知らせる。
ハヤッチョル……流行している、人気が多くて成功。
ハヤラシイ……流行させるアイデアを、宣伝次第で効果。
ハユカリャ……早いなら、早いことは得に結びつく。
ハユカル……早くから始めている、早いがお得の場合も。
ハユル…生えたようです、希望の物が見えたので、うぶ毛。

ハユデン…早くてもよいので、はやかれば都合がよいから。
ハユー……早くして仕上げる、急ぐので、至急に。
ハユヤル……早くするので信用が、早く性格にしてこそ。
ハユーチ…生えたようです、生えそうですから、生えたら。
ハユナリャ……早くなればそれだけ得に、早くなる練習を。
ハユイルリャ……早く入れておけば、早く入れて始末する。
ハユデン……早くても仕上がりが、早いだけでは問題も。
ハユコンカ……早く来なさいよ、早くきて待っているよ。
ハユキー……早く来なさい、早く来ないと間に合わぬ。

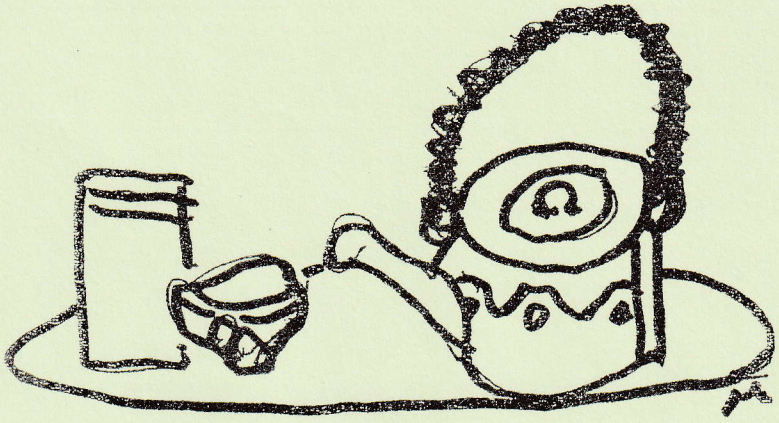
は　ハヨシイ…早くしてください、はやくしないと間にあゆぬ。
ハヨセンカ……はやくしなさいよ、早くして行きましょう。
ハヨダセ……早くだして、早くだせば間に合うが。、
ハヨナリャ……早くなれば都合よいが、早く実ったので。
ハヨー……期待している、早く、至急に、大至急にお願い。
ハヨカル…早くから、加勢に来てもらって、早く完成した。
ハヨーコイ……早く来なさい、早いがお得です。
ハヨナラは……やくなら助かります、早いなら加勢お願い。
ハヨキー……早くきて、早く来なさい、早くきて応援を。
ハヨミチ…早く見てください、早く目を通して、早く検査。

ハワカンゴツ……掃かないてせよいので、掃かないで。
ハワキチュウブ……掃く性格が評判になって。掃除好きで。
ハワケ……掃いて奇麗に、清潔第一の場所、奇麗にします。
ハワイタンカ……掃いたのですか、掃いたら水撒きも。
ハワイチョケ……掃いておいてください、間もなく来客が。
ハワクソベ…掃くそばから散らす、掃いたので散らさない。
ハラクリーヤツ……腹黒い性格な人、人にそう言われる。
ハラワニャ……払わないと、支払いの義務がある。
バラバラ……散らばってしまった、思い思いになった会議。
バラセ……壊して、分解して、解体して素材に戻す。

ハラガセク……腹痛になって苦労、腹痛で医者に診察して。
ハラマキュ……腹に巻いて冷やさぬよう、寝冷え防止に。
ハラゲイン……腹を使った芸人の技、話上手な人。
ハラセ……晴らして、張って準備する、誤解を解いて。
ハラエ……支払いします、払って清算を、借りは返して。
ハラキンチャク…胴巻き、腹巻に財布を入れ落とさぬよう。
ハラモミモ……腹も身のうちだから、腹八分が無難。
パラット……気前よくまき散らす、景気よくマイテ祝う。
ハラシボリ……腹が絞る食当たりでは、早めの予防検査。



料領



一荷和尚たぁドケナ人じゃつた

寛文年間《１６００年代》の人じ　オカチャンな原村かる　嫁いだ美人じ『おちいさん』ち　言いよったが　子宝に恵まれんじ悩み過げた　そん挙句に『三夜の待ち月』に　願をかくるこちしました。毎晩バケツに水ぅ　はっち生まれ石ん上じ　三夜様に祈ったんじゃつた。

別ん説にゃ霊山に月がかかると　水バケツを頭に乗せち　そん月を写した。一心が通じち　３年３月にしち　恵まれたもんじゃき　そん喜びようはもう　天にものぼる思い。名前も一華和尚といわれ　生まれ石は大田ん　地福寺にあった。三夜さま行事は今も地区にゃ残っちょる。

こん地福寺も　現在は福宗ん『三国境』に　移動しち地域ん人たちにも　心んより所になっちょる。三国境たぁ江戸期頃にゃ野津原、諏訪、谷ん各村が　ここじ境おうちょるき　こげな名前がちーたが　夏の涼しい別天地　各村んひとたちが　ここじ出会うことじ　交流やら情報交換と　知識交流ん先進地でんあった。

一華和尚は愉快な　性格が人に好かれ　和尚としての人の教えも論す　笑いとユニークな　話題もよけい残した　情愛にも長けた和尚でんあった。多くの人たちにも慕われ　力持ちでんあったき　激しい世相も駆け抜けた　特異的な人材でんあったよう。心が豊かじあり人ん気持ちが　ゆう解るもんじゃき　悩みん相談なんかも　相手しちくれよった。

そん幾つかを　五助が得意にしゃべっちくれた。そん一つに力ん強さが解る話があった。自寺ん屋根替えに　竹がいるごつなった。それもデーぶん　イルンジャキ　気がねしながら　相談しちみると　『一荷ぐれならいいで』ち　気持ゆうもらえた。

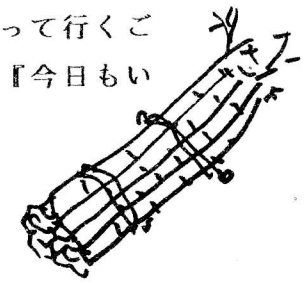
まものうんことじゃつた。朝早ぅかる竹山が　さわがしいきばあさんが覗いち見た。なんと一華和尚が　竹切りに来ちょる。じゃが　見渡すかぎり　竹が切られち　見晴らしゃユウナッタ。じゃがタマガッチシモウタ　『一荷ぐれ』　そげな話じゃつたき　そんくれならち　『いいで』ち　返事したんじゃつた。

一時見ちょつたが　『いいで』ち　承知したんじゃき　今更『悪いで』た　言われんもんじゃき　どけするか　見ちょこうちソキー座りくうだ。一時しよったら　集めでーち　思いよると竹縄を作っち　そん上に竹を並べはじめた。そりーしてんあれだけを　一ペンに運ぶじゃろうか　となりゃ約束は違う。

じゃがさすが　力持ちん和尚んこと　集めた竹が　間ものう竹縄に行儀ゆう　並び両方からかけた　竹縄にうまい具合にクビラレチしもぅた。『ありゃりゃー』　見ちょつた　ここんばあさんも　そん見事な荷作りに　タマガッチシモウタ。『何してんまぁ　旨いもんじゃなぁ』

残った１本は『どげすんのじゃろうか』　心配いらんわな帰り路ん杖にするらしい。足場を踏み固めち　ぐいっと力いれサット　担ぎあげた。見た方がもう　吃驚業天。いやそん度胸んよさに　改めち脱帽したんかん　へなへなと座りのうじ　しもうた。気がつかんじゃつたんか　そんまま帰り始めた　もんじゃき力持ちに　寺を思う情熱に　そしち約束が守られた　そん律儀さにも　感服しちしもうたごたる

そろそろ陽がりぽりでーた。『こりゃー天気になりゃ　暑ぅなるど急がにゃ　そうじゃお礼はまた　改めち来るこちしゅう　一人言いいながら　スタスタと急ぎ足に　寺に帰って行くごたる。瞬くまの出来事　でんなんかすがすがしい。『今日もいいことありそうじゃ』



こげなことがあっち　誰言うとなく『一荷和尚』とん　呼ぶこちなったそうな。五助さんがん　話しゃまぁ続くごたる。江戸期になっち　参勤交代も制度化され　江戸に上る機会も多ぅなった。こんだも行列が　また来るこちなったき　そん役割が配られた。神官やら僧侶は　格別に扱われるき　特別な事以外は　参加せずともよかったが　急にに人手が不足じ　帰り道ん　坂口かるん湛水まじが　どしたんか一華和尚に　出るように連絡があった。

もうすぐん事じゃき　別の人になんか言うと　ますます困るき『しかねぇが受けるか』に　なっち当日になった。が腹に一物は消せなかった。もんじゃき　駕籠かきん相棒と　打合せち横路じ『眺めがいいき休憩してくださいませんか』ち　願い出たところ役人は　『まかりならん』じゃつたが　殿様に進言したら　『そりゃいい　久住にゃ早着きじゃき』と　お許しがあった。

一華和尚も『悪げじゃねぇ　本当の事を理解してほしい』　そげな願いがあったきこす。坂口じ交替しち　いよいよ街道が上りになった。骨折りん場じ　誰でん嫌いな場所。じゃがお勤めじゃき　愚痴はいえないんが　領地民のご奉公でんあった。『ここで一息休憩します』

先役の声で休憩になった。一華和尚は先棒に目じ合図　駕籠を放させた。そん駕籠を一人で　クルリット　回すと崖先に差し出し『お殿様ここは　とてん眺めがいい場所です』と　小声で駕籠の中の殿様に話しかけた。駕籠の中の殿様も　それが聞き取れたのでテッキリ予定の場面と　安心しち駕籠の戸をあけた　とドウジャロウ　駕籠は崖の上に宙に　差し出されちょつた。

『おいおい　これはどうしたのか』　慌てたお側付きが　走りよると『力持ちの僧が今日は駕籠番で　ぜひこの場面を　お見せしたいとの趣向でございます』『うん……そうか』

殿様も静かに駕籠の　戸をあけたんですが　なんと下はまさに谷底　目もくらみそうな高い崖　見渡しただけじ　もう目まいを起こすごたる　気持ちになったが　そかー殿様　ぐっと我に帰ると　『うんいい眺めじゃのう　気くばり嬉しいど』『ははー』と一華和尚も　担いだ駕籠の重さに　感じ入っちしもうた。

『よろしかったら　元に戻しますが』『よきに　はからえ』『ははぁ　ありがたき幸せ』　駕籠を元にもどしたので　先棒もすぐ担いだ。側付きん役人も　ヒヤヒヤ冷水３斗じゃつた。が『じゃ　発つかのぅ』『ははー　お発ちー』　事無きをえて湛水に　ゆっくり移動した。一華和尚も交替した。

お茶の接待も　そこそこに今市まじ　進んじここじ　ゆっくりお接待を頂くが　側付き役人から　『今市まじ　お供しち　あそこじお殿様が　話を聞きたいととの　おぼし召しじゃき』と　耳うちされたごたる。『やっぱそうか　本当んこつ　解っち貰う』一華和尚も　それがいいち安心した。

お接待の合間に　殿様にじきじきに　お話の時が許された。き常から思うことも　お話申し上げた。神官ゃ僧侶は　いついかなる時にでも　即応するだけの　責任ある仕事をもっている。だから特別の仕事以外は　苦役は免除されている。なのに急に呼び出しの『駕籠かき役』　あまりに常識はずれの　対応と思われた。

お供奉仕の気持ちはあります　がそこはきちんと整理する。心くばりこそが　領地民の頭に立つものの役目と思います。『生意気な進言はお許しください』と　詳しい説明に　殿様も感じいりおわびの　言葉も頂いたようじゃつた。『お手当てなかったん』『こんだ会うた時にゃ　聞いちみるわ』　『殿様も感じ入ったち思うんが伝わっち　来たち言いよったわな』

三国峠かる東に向いち　進むと籠の台、福宗、岩下、野野台、船平、野津原んコース。福宗かる伊塚越えち　赤坂　一の瀬と続く。北に下ると　谷、挟間に出る　谷村⇨挟間幹線。南に下ると　大田、諏訪盆地。諏訪からは　各地に分岐しち　特に街道に　各地じ結びつく。

西に抜けると　今畑、田の口　栗灰。片や湛水じ　街道に結ばるるが　殿様がヒンヤリサセラレタ　横道が左手にあった。

五助ん馬子唄どま聞くと　そん夢物語も脳裏に浮かぶき　何か人間の旅双六も　面白いもんでんあった。空き荷になった馬を引いち帰りよると　すぐ追いちーた旅んしが　『五助さんじゃろう　馬子唄聞かせちくれん』　こうなりゃ『いや』た言い切らん性分　それがいい所でんあった。

府内帰りの馬子唄聞けば　針を持つ手がまた止まる
　　ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。

御輿回せばいつしか夜も　更けて二人の大田川
　　ハ　七瀬のせせらぎ　小鮎がスイスイ　ホイホイホイ。

在所恋しや歩けば三里　山が高ぅじままならぬ
　　ハ　七瀬のせせらぎ　紅葉がチラチラ　ホイホイホイ。

……　方言説明　……

８９Ｐ　オカチャン…母親。おうちょるき…接点。こげな…こんな。ちた…ついた。もんじゃき…ものですから。デーブン…だいぶ。イルンジャキ…必要だから。

９０Ｐ　まものうんことじゃつた…やがてのことで。じゃが…ですが。いいで…よいよ。どけするか…どうするの。

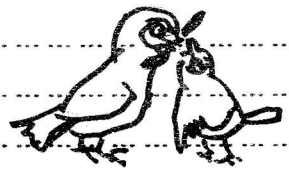
９０Ｐ　ソキー…そこに。竹縄…竹を割って薄く裂いたものを結び縄として使う。そりーしてん…それにしても。クビラレチ…束ねられて。どげする…どうします。

９１Ｐ　こんだも…この度も。どたんかん…どしたのですか。しかねぇか…仕方ないでしょう。悪げじゃねぇ…悪い気持ちじゃない。クルリット…くるっと逆に。ドウジャロウ…どうでしょう。

９２Ｐ　じゃ…では。やっぱ…やはり。いついかなる…急な用事の時にでも代わりができないから。

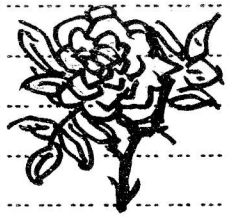
△△△　五助さんがん話やら　唄やら聞くとイツマデン　ついち行きてーごたるけんど　そう言う訳にゃいかんき　ここへんじサイナラ　シュウカナエ。『ほんな今市まじ　行かんならんき　途中じ『石たたみ音頭』　唄おうかなぁ。△△△

１…竹のさやゆれ　こぼれ陽くぐり……
　馬子も嬉しや　こん石だたみ……
　赤いボックりん　響きが旅の……
　草鞋脱がせた　おばねの宿は……
　あれが今市　肥後街道。……

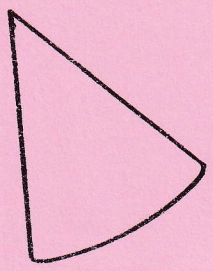


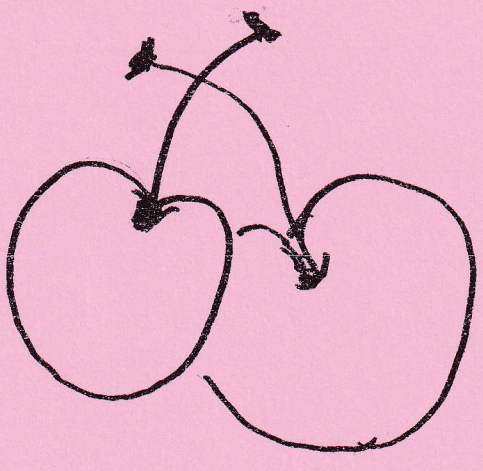
２……久住のつはる縁じ結ぶ
……お国訛んこん石だたみ
……四百歳得た《ヨヒヒャクトシエ》味ある中に
……寄っちいかんな手盆の餅は
……牛が負けたち肥後街道。

３…えーて帰った　里の灯見ゆりゃ……
　ダリも抜けたど　こん石だたみ……
　肩を抱かれた　七瀬ん風に……
　針も止まるか　馬子唄聞けば……
　こいさも楽し　肥後街道。……



瑚変





★★★　五助の夢話　山峰経塔　★★★

明治８年《１８７５》に旧岡領ん沢田村　明治４０年《１９０７年》東大野村沢田　そしち昭和３年《１９２８》大野町沢田さらに　昭和２２年《１９４７》に　大分郡編入じ野津原村沢田に。昭和２５年にゃ今市村と　ともに合併しち野津原村沢田に　なる変革ん多い地区じゃつたが　由緒ある沢田ん名前は　今も継続されちょる。

西日を受けた傾斜山腹に　大乗妙典の数塔がある。甲斐国蘭宝東[illegible]、寛保２年《１７７９》　戊歳１０月下没。山峰じゃ教塚ち呼ぶ。経文と法衣を箱に納めち　埋めたち言われちょる。快洗和尚が出世しち　故郷に納めたち伝わるが　もしかしち山峰生まれん　京都修行中に　甲斐の国に要請されち　武田信玄の菩提寺じある　恵林寺に入った。名言『心頭滅却すれば火もまた涼し』と　残した事が後世まで生かされる。

武田勝頼が織田信長に　攻められた際に恵林寺の　禅僧快川が火の中に端座しち発したと　言われちょるんも　いかに武将ん心を警護したかが　伺える。そげな宿命を背負った　心境が言葉ん中から汲み取れるが　機会捕らえて故郷を尋ね　思いがこもる経文と法衣を納めたのも　覚悟の帰省じあったんか　当時の世相じゃこんな形が　思う気持ちを夢に　託した行動でもあったのか　巡り会わせた　人間の宿命は悲しくもある。

教塔んすぐ近くにゃ　庚申塔群があり　１６００年代からん３０年期ぐれに　毎回立てた健気さは　故郷の人情が幸せ人生を　祈念し続けた足跡が　浮かび上がっちも来る。庚申信仰は故郷ん　無病息災住民安穏　豊作年寿などが　託されちょるよう。そこにも人間の赤裸々な　思い願いが隠されちょる。

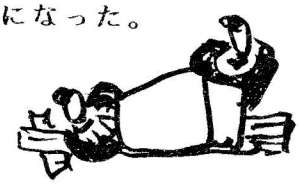
当時は大野郡からん　ルートを入った　河野《コーノ》ん流れをを汲む人たちが　故郷としち定着したよう。讃岐守の墓石があるんも　殿様中心に静かな　桃源郷があったのじゃ　そげな余韻が感じられる。讃岐守の刻字は『天正７年…１５７９』　素朴なそん墓石にゃ　質素倹約しても　住民が幸せなら一番と　きっといつも論したのじゃあるまいか。

地区ん真ん中に大きな　『いのこ』がある。いつも出水が沸き生活用水んほか　あふれた水は稲作ん　灌漑用水にもなっちょるが　時折作る豆腐は　作り貯めしち　こん『いのこ』ん　片隅じ冷蔵庫がわりに　しばし休憩しちょった。ダマシお客さんが来た家んし　『すまんけんど豆腐１丁貸してな』『いいで』　１丁鍋に入れちセワシュ　帰る。シイタケ出しん豆腐ん入った　卵吸いもんが　若い娘ん手づくり。ひょういとすりゃ　『牛見に来た』んか。

米麦だけじゃイノチキ無理。そげな場所じゃき　山が頼りんしが多い。炭焼き、割木薪、竹、ナバ、ワラビ　ゼンマイ、野山ん資源がし生かされち　それが生活を支えちくるる。子供ん学校まじゃ　１里半ぐれじゃき　６キロあまり歩くき　達者にゃするが雨や冬ん寒さにゃ　ムゲネエ条件でんあった。

じゃき遠足はここあたりん　野山に出かけち　先生も家庭訪問ぬ　兼ねちしよった。それでん住めば都　讃岐守ん教えを守り頑張ったもんじ　国ん山やら県の山ん　下狩り仕事が経済を支えち　くれちょつたもんじ　遠方に働きでらんでん　家族がみんなそれに携わる　仕事に精出せば　まずまずん生活が約束も　されち怪我と病気がなけりゃ　まずまずん地域でんあるのじゃろう。

近年横断農免道路が　由布市かる大峠を越えた　豊後大野市につらなる道路。トンネルも開通しち　いよいよ至便になった。



狭い谷添いと一方は　傾斜がちーた崖つづきん　まがりくねった生活道路。もうでーぶん前んことじゃつた。山奥かる杉まるたが　トラックじ積みだされよった。トラックにしちみりゃ　制限いっぱい積まにゃち　つい欲もでるもん。気はつけち用心しちくだっちょつたが。

まがりカーブかる　するりホキん先に出た　次は左り切っちとそん時じゃつた。バフンドしたんか石に　乗り上げたんか車体が　浮いたち思いよったら　曲がりカーブ特有に　荷物が右に揺れた　そん反動じ車が　傾いた……と右傾斜　残念もう間にあわない　重心が右に片寄った　そん動きが車体を　右にかやすと狭い道から瞬間に　右手の谷に落ちて行く。

五助さんも瞬間　『南無助けてあげて』と　祈念したが　ここからじゃどにもならん。積んだ杉はロープが切れ　四散したけんど　ハンドルしっかり　握っちょつたんじゃろう　二転か三転のあとに　座ったごたる。じっと見つめたそん　目に入ったんはどうやら大丈夫　這い出したごたる。

『知らせてやらにゃ』ち　思いよったら　誰かが連絡したんか近くん　田中医師が飛んで来た。一命は取り留めたき　ほっとしたじゃろうが　よくもまぁ運がよかった。ち心じ喜くうだ。あっちゃならん事故　それでん今まじ　なかったきち　安心はしちょった心ん隙に　予期せん事故ん発生になった。細い道や路面の問題もあるが　肝心なのは運転する　そん人の心の問題でんあろう。助かっちよかったけど……。

人間な慣れ過ぐると　これくらいならチ　つい横着にもなる。『こんくれなら』が　し失敗にもつらなる。信号んねえ場所横断『ゆう見ち』が　見たら大丈夫ち　そん思う間に車は走るんで。それも　あんたよりゃ早いんじゃき。

明治３０年５月１１日《１８９７》小野肇さん、４３年３月２１日《１９１０》ん小野ハル子さん　たち伝承ん『ほうちょぬべぬべ』が　昭和５２年２月２６日　民謡研究家ん加藤正人先生の採譜かるあった。唄を二人が歌うと　踊りを　佐藤トメさんが《明治４３年５月２日生まれ１９１０》　奈須よしみさん《大正１１年２月２８日生まれ　１９２２》ん協力もあっち　中部小学校郷土芸能文化創造クラブ伝承　平成３年１１月１４日に見事成功した。

古くからん口説き唄も　矢の原ん田崎奈良熊さんが　伝承した春徳丸ん団七踊りから　引用した盆踊りに使った　懐かしいものじ後に　野津原向きの歌詞に　作り替えさらに馬子唄にも　利用できるごつなった。これも浪曲『七瀬馬子唄』かる　流用したもんで裾野がひろがっち　行く楽しい採譜活動じゃつた。

△△△　方言説明　△△△

９５Ｐ　快洗、快川は同一人物。あったんか…あったのですか。

９６Ｐ　いのこ…飲料水がたまっている小さな池。牛見に来た…嫁さん捜しに来る。じゃき…ですから。ダマシ…急に。いいで…よいですよ。ひよぃとすりゃ…もしかしたら。ムゲネェ…かわいそう。ここあたり…この周辺で。くれちょつたもんじ…頂いていたもので。あるんじゃろう…あるのでしょう。

９７Ｐ　ホキ…突端。かやすと…傾けて。じゃろう…でしょう。ごたる…ようです。じゃろうか…でしょか。あっちゃならん…あっとはならないことで。

中部小学校では　古い郷土文化に取り組む　意欲が大きくて　芸能を運動会の『集団演技』に　さらに『子ども神楽』の　育成にも熱を入れた試金石になったごたる。

あとがき

野津原方言集の　№２９号の原稿編集が　やっと終わりました。ご愛読くださる　皆様に早くお届けして　今回も素人集団が心をこめて　収拾し編集し歴史に　方言を交えて思いで多い　世相の断面も取り入れました。今回からタートする　街道物語が始まりその　表紙にも『浮動岩』を　掲載いたしました。

三助さんが同じ肥後領の　水に不便な野津原に　水路を引いた話を　新旧織り交ぜて苦労話　支援する人たちの郷土愛　許してくれた領主や関わる　人たちの心くばりが　各所にチリバメラレ７回に分割しました。特に資料が片寄った場所だけに　難点もありますがその点は　ご理解いただきたいと　願います。

浮動岩の場面では難渋のあけくれ　そんな場面状況に浪曲も入る素人の　怖さも笑いを誘いそうです。が歴史を使う技法として　これもご了解の程をお願い申します。

方言単語は『は』の『ラ』まで　進みました。４０５５１語になります。勿論同じ言葉でも意味がことなる　又は方言ではないなど　違和感もあるでしょうが　素人ばかりの取り組みです。のでお許しの程を　使ってはいけない方言　卑下することば　差別用語もありますが　方言集の性格上ご了承ください。

『五助の夢話』　古い伝承から伝説　記録にはなかった逸話　心に染みる戦時下の苦難　なども入りました。真実とは離れているかもしれませんが　本当はこうではと思う辛さ　だから記載できたと思います。ご支援ご愛読に厚く感謝し　皆様のご健勝をお祈り申しています。

野津原方言調査会員一同

29

伝言板

№３０号

続編№３０号《通算４０号》

今回もご愛読を誠にありがとうございました。連続シリーズも　五助さんが旅人と連れなって　故郷野津原を行く珍道中　三助街道物語は２回目です。難渋の水路は　果たしてどんな苦難の道を辿るか。

『五助の夢話』は　逆修墓を尋ねて戦火に　苦難の戦国武将の宿命を。お父さんは戦争に…女性の底力。人の宿命は紙一重。開拓青年の根性が生きる…宝の玉手箱。方言単語は『ひ』項⇨『ン』まで。焼き米の味…故郷の味。川の怖さ知っておく…子どもの世界。宿場に辿りさくまで…民話、伝承。などが入ります。

県内にも『方言調査』を　始めたグループがあり　同好の人たちの意気込みに　エールを贈りました。今だから出来る勇気を生かした　取り組みは再び取り戻すのは　不可能に近いかもと　喜んでいます。とにかく書留ておく　そこから物事は発車後は根気とやる気があれば　成就するものです。

２２年前に『よだきいなぇ』と　愚痴いいつつ取り組んだそれず継続出来たのです。自分の執念に感謝し　多くの皆様のご支援ご愛読に　厚くお礼を申し上げます。ご自愛なさってのお過し　心よりご祈念申しています。

令和２年４月吉日

野津原方言調査会　５８８＝０５７２
事務局　５８８＝００９２